

# 十全同窓会会報

〒920-8640  
金沢市宝町13の1  
金沢大学医学部  
十全同窓会会報  
編集委員会  
印刷/ヨシダ印刷(株)

## 卒業生に贈る言葉

(題字：中村信一 十全同窓会会長)

### 医学類長 多久和 陽



医学類および医学部は一二〇名の卒業生を送り出しました。金沢大学医学類の教職員を代表して、皆さんに心よりお祝いを申し上げます。

皆さんの社会への門出にあたり、「贈る言葉」を申し上げます。皆さんはほぼ全員が、これから初期臨床研修医として医師としての第一歩を踏み出されます。よく言われることです。医師ほど、自分の知識と経験が問われる職業はないと思います。自身が病気についてどれほど正確な知識を有しているかをきびしく問われます。主治医が病気をよく知らなければ、治る病気がありません。自分の能力で勝負する職業です。ですから、常に新しいことを学び、知識を刷新していくことが必須となります。常に勉強していく覚悟を求められることを肝に銘じてください。

医師という職業のもう一つの特質は、人間相手の仕事であることです。同じ病気でも、患者さんによって個人差があるので、おのずから対応も違ってきます。患者さん一人一人の人生に理解をもつて、共感をもちながら診療していくことは、実感を覚える仕事です。そのためにも、患者さんとよく話をするとはとても大切で、患者さんと十分にコミュニケーションを持つことを心がけてください。

皆さんは医師国家試験をパスして資格を取得されましたが、卒業時はあくまでスタートであり、毎日臨床の現場で働く初期研修は学生時代の臨床実習とは全く違います。そして、この二年間の臨床研修は、自分の進路を見極める意味でもたいへん重要な時期です。いろいろな経験をすることができる期間ですが、自身の価値をつくるあるいはキャリアを育てることを常に意識して、生涯をかけて打ち込めるものをぜひ見つけてください。近年、大学に残って研究する医師あるいは基礎研究者が減少してきており、将来の医療の進歩に影響をなげかけています。知識や技術を学ぶだけでなく、研究心を持って医療に取り組み、それぞれの立場でぜひ医療の進歩に加わっていただきたいと思えます。

初期研修の二年間、そしてその後の数年間は、皆さんの医師としてあるいは研究者としてのスタイルができていく時期です。一旦身についた生活習慣は一生続けられますので、よい習慣を身に付けることがとても大切です。今日ある北米の医学教育の基礎を築いた、有名な医学者ウィリアム・オスラー博士はこう述べています。「人生は習慣であり、よい習慣を身につけることが大切である」と。医師、研究者として成長するために重要な資質、つまり、よく観察する習慣、集中して考える習慣、系統的に対処する習慣、学習する習慣、そういった資質を努力して育て上げ身に付けていくことが大切であると述べています。長年にわたり絶えず繰り返すことによつて身についた確固としたよい習慣は、大きな力となつて皆さんの成長を導くと思います。

どの道を歩まれるにしても、これからの長い人生の間には、思いがけないことが起こります。社会に出ていかに困難な場面に遭遇しても、戸惑うことなく正面から状況に向き合つてもらいたいと思えます。これから出会うさまざまな課題、困難には英知を傾けて正面から取り組み、これを乗り越えて成長されることを心から願います。日本の医療には、よいところがたくさんあります。非常に公平、一定以上の質の医療が全国どこでも受けられる、大学病院、市中病院、かかりつけ医など、どの医療機関でも患者さんが自由に選んで医療を受けられる国は世界にあまりありません。これは国際的に見ると恵まれています。しかし、人口の高齢化が進む中で、医療費が増大し、これからの医療には解決すべき困難な課題が待ち受けていると言われています。どの道に進まれても、皆さんは医学・医療から離れることはありません。金沢大学で学んだ皆さんには、ぜひ広い視野から国民の健康に関心を持ち、国民の幸せのために、皆さんの専門知識・能力を使つて下さい。これを期待申し上げます。私からの挨拶といたします。

## 平成二十八年年度 金沢大学医学部十全同窓会総会

日時 平成二十八年七月二日(土)  
午前八時四十五分

場所 医学部記念館  
式次第

- 一、開会の辞
- 一、議長選出
- 一、議長挨拶
- 一、物故会員に対する黙祷
- 一、会務報告
- 一、医学系研究科報告
- 一、医学類報告
- 一、支部長紹介
- 一、議案審議

- (一) 平成二十七年年度事業及び決算報告
- (二) 平成二十八年年度事業計画及び予算(案)
- (三) 役員改選
- (四) 医学部創立百五十周年記念事業について
- (五) その他

### 《教授就任講演》

(1) 視床下部による血糖産生の調節とその異常の解明

代謝生理学 井上 啓教授

(2) 重症患者におけるより良い鎮静・鎮静を目標して

麻酔・集中治療医学 谷口 巧教授

(3) 胆管に魅せられた四半世紀の研究史

人体病理学(病理二) 原田 憲一教授

### 《プロムナード完成式》

医学類正門内にて、医学類及び附属病院のプロムナードの完成式を行います。

会場：医学類教育棟大多目的室

教授就任講演は、脳科学専攻・がん医科学専攻・循環医科学専攻・環境医科学専攻のConductanceを兼ねます。

石川県医師会生涯教育研修会指定を受けております。多数ご来聴下さい。

# 創立百五十周年記念事業について

百五十周年記念事業実行委員長・医学類長

多久和 陽

医学部創立百五十周年記念事業として、十全同窓会には宝町キャンパス整備事業に多大なご貢献をいただきました。宝町キャンパス整備事業は、医学部記念館の改修工事とメインプロムナードの整備の二つの事業からなり、国からの平成二十六年度予算二億円と、皆さまから賜った百五十周年記念事業募金と十全同窓会からのご寄附を合わせた一億円の、合計約三億円が充てられた大規模なキャンパス整備事業です。

医学部記念館の建物本体の改修は、昨年三月までに終了しています。一階の展



写真1

示室および二階の多目的ホールは内装を一新し、建物全体を耐震補強しました。展示室は、天井・壁面をシックな黒色調とし、現代的な展示室に生まれ変わりました。展示物も、明治以来の多数の貴重な資料の中から、伝統と歴史の中から医学者としての心構えや研究の大切さを伝えて深く考えるための教育の場となること、同時にわかりやすい展示とすることを意図し、十全同窓会や金沢大学資料館を初めとする関係機関からご意見を頂戴して展示物を厳選して展示しています。また、十全同窓会からの約二千万円のご寄附により、展示室内のショーケースも一新しました。この他に、医学部記念館の一階と二階に、学生・若手教員用の教育研究スペースを計三室新設し、広く利用されています。

メインプロムナードの整備事業は、十全講堂玄関から医学部正門に向かって真つすぐに伸びる樺並木の道路は、十全講堂周辺および医学部記念館周囲と同様に擬石平板で道路表面が舗装されています（写真1、正門から十全講堂に伸びる樺並木）。現在は、病院エリアの工事がまだ続いているために樺並木の道路は駐車許可されていますが、工事終了後には車両を排除した幅広い遊歩道とし、メモリアルプロムナード「医学の道」として宝町キャンパスのシンボリックな景観となります。病院エリアの駐車場およびバ



写真2



写真2

ス・タクシーの乗降場の整備工事も終盤も迎えており（写真2、右…樺並木から見た工事途中の駐車場、左…病院玄関前）、本年五～六月ごろには完了の予定です。

医学部記念館の改修工事、プロムナード整備事業と合わせて、金沢市により医学部・病院前の用水沿い遊歩道が整備されます。すでに、キャンパス内の遊歩道はかなりの部分ができあがっています（写真3、右…正門付近のキャンパス内遊歩道、左…市道側からの景観）。学

生や教職員、患者さん、市民の憩いの遊歩道となることを期待しています。宝町キャンパス敷地と市道境界のレンガウォールは、明治四十五年（1914年）に金沢医学専門学校が移転新築された時のものと判断されます。このレンガウォールは百年以上にわたり地域で親しまれた景観です。できる限りこれを残す計画です。記念事業実行委員長として、記念事業の最終段階に入ることをご報告できますことを、心から喜んでおります。これもひとえに、十全同窓会会員各位のお力添えの賜です。十全同窓会会員の皆様に深甚の感謝を申し上げます。



写真3



写真3

就任挨拶

理事・副学長に再任



山本 博

平成二十八年四月一日付けで、国立大  
学法人金沢大学理事（国際・附属病院・  
同窓会担当）・副学長に再任されるとこ  
ろとなりました。

平成二十八年度は、六年間に亘る第三  
期中期目標期間の初年度にあたります。  
今年度とくに重要と考えられることは、  
国立大学の類型化に対応した歩みを着実  
に開始することです。金沢大学は、重点  
支援③大学、すなわち「卓越した国際研  
究大学」への道を選択しましたので、海  
外のトップ大学と伍し、世界に通用する  
研究教育活動を展開しなくてはなりません。  
私たちには幸い、「スーパードロー  
バル大学」への選定（平成二十六年度）  
につながった、国際化の実績やプランが  
あります。これらを基に、国際的な共同  
研究、研究者・大学院生交流、国際共著  
論文発表、国際特許・技術移転などを、  
さらに一つ二つ三つ……と積み上げてゆ  
くなら、「卓越した国際研究大学」とし  
ての地位を固めるに至ることは必定かと  
存じます。

附属病院に関して重要と考えられるこ

とは、まず、臨床研究の推進です。先行

拠点の中央値が承認要件とされましたか  
ら、ハードルは高いのですが、医療法  
上の臨床研究中核病院への申請・承認  
を目指すべきですし、これにも関係して、  
北陸臨床研究機構や先端医療開発セ  
ンターの活動も充実させてゆかねばなり  
ません。つぎに、旧国立大学財務・経営  
センター（現大学改革支援・学位授与機  
構）の分析によれば、昨今国立大学附属  
病院の経営が総じて厳しくなってきた  
中、並木前病院長の下、全職員が一丸  
となつて経営改善に取り組んだ成果を含  
め、本学附属病院の経営状態は比較的良  
好な部類に属するようです。蒲田新病院  
長とも力を合わせ、収益を研究教育診療  
の充実に還元できるような病院マネジメ  
ントを追求したいと存じます。

同窓会は、金沢大学の総合力を支える  
重要な要素です。海外同窓会も六つに増  
えましたが、医学部十全同窓会ポストン  
支部（広瀬竜夫支部長）を嚆矢としてい  
ます。金沢大学学友会を構成する基幹同  
窓会のうちでも、十全同窓会はリーダー  
的存在です。会員の諸兄姉には、ひきつ  
づき何卒よろしくご支援ご協力を賜りま  
すようお願い申し上げます。



医薬保健学域長・研究域長に就任



金子 周一

この度、皆様のご推挙をいただき医薬  
保健学域長・研究域長を拝命しました。  
これまで医薬保健学総合研究科長・医学  
系長として、皆様のご支援をいただきま  
した。有り難うございます。

医薬保健学域は、人間社会学域や理工  
学域と大きく異なる点があります。一つ  
は、学類の卒業生に、厚生労働省が定め  
る医師国家試験の受験資格が与えられる  
ことです。すなわち、医薬保健学域の教  
育は、文科省、厚労省の二つの省によつ  
て科目が定められ、履修すべき内容が詳  
細に決まっているために、他の学域と異  
なる教育体制が必要となります。

もう一つの異なる点は、研究の対象で  
す。私たちの研究は生命を対象とする  
という特徴から、他の研究域とは異なる倫  
理観、研究体制が必要となります。さら  
に附属病院という医療の現場があります。  
同じ大学の教員ですが、他の研究域とは  
異なるこうした使命をかかえて、私たち  
医薬保健研究域に所属する教員のアイデ  
ンティティが形成されていると思います。

知的基盤社会における大学の役割は大

きく、政府は国立大学法人に対して、これ  
まで以上に積極的で強力な改革を求めて  
います。これを受けて、金沢大学におい  
ても、山崎学長のもとさらなる発展にむけて、  
いくつもの改革がすすめられています。医  
薬保健研究域も、積極的に協力して改革  
をすすめる必要があります。しかし、改  
革の思いは同じであっても、アイデンティ  
ティの異なる研究域の現状や課題とな  
る意外にお互いが分からないために、提案  
される改革方針や方策が私たちの考えと  
微妙に違っていることがあります。

金沢大学は総合大学であり、私は、こ  
の違いはある意味で好ましい違いである  
と思います。重要なことは、多様な考え  
方があるなかで議論をつくし、理解を深  
めて、改革をすすめることです。そのた  
めには同じアイデンティティをもつ医薬  
保健学域・研究域の教員がしっかりとま  
とまって、さらなる発展をめざすことが  
必要です。このことが、医薬保健学域・  
研究域だけでなく金沢大学全体の発展に  
つながると信じています。

私は微力ですが、一人一人の教員が自  
信と誇りをもつて金沢大学に勤務できる  
ように努力したいと思えます。そのため  
に、医薬保健学域・研究域が同じアイデ  
ンティティのもとにまとまって、さらな  
る発展ができるように努めてまいりたい  
と思えます。先生方のご支援をいただき、  
この任を務めさせていただきたく、何卒  
宜しくお願い申し上げます。

## 医薬保健学総合研究科長に就任

堀 修



このたび、医薬保健学総合研究科長を拝命いたしました。私は、平成二十一年から神経分子標的学（解剖学第三講座）を担当させていただくと共に、主に教務関係の委員会において、学士課程、大学院課程の業務に携わらせていただきました。

現在、医薬保健学総合研究科を取り巻く教育・研究環境は大きく変化していると言えます。平成二十六年、金沢大学がスーパーグローバル大学（SGU）事業に採択され、「グローバル社会の中核となつて活躍できる人材の育成」が全学的に大きな目標として掲げられました。また、今年度から始まる国立大学法人の第三期中期計画において、金沢大学は、第三類型、つまり「世界的に卓越した教育研究を行う大学」を選択いたしました。更に、本年度から、医学系の大学院として全国的にも類のない、先進予防医学研究科がスタートし、医薬保健学総合研究科とともに、世界と戦える研究医・臨床医を育成していく体制作りが開始されました。

このように急速な改革が進められるこ

とにより、一方で、日々、教育、研究、臨床活動に従事している教職員に対して負担が増大しているのも事実です。しかし、私は、学士課程、大学院課程を問わず「人材の育成」は非常にやりがいがあり、何にもまして大切な仕事であると考えております。また、これまでの歴史を見れば明らかのように、金沢大学には世界で活躍できる優秀な人材を育成する伝統があるとも考えております。私は、医薬保健総合研究科に携わるすべての教職員、学生の皆さんとこの考えを共有させていただき、一丸となつて現在進行中の改革を確実に進め、より良い「人材の育成」に貢献したいと考えております。その意味でも、研究科長の役割として、大学院教育の実質化やグローバル化と言った、具体的な課題を一つずつクリアしていくことはもちろんですが、各方面の先生方と意思疎通をはかり、医薬保健学総合研究科が一丸となつて改革を推進出来る土台作りに尽力したいと考えております。

私はこれまで、医学部卒業後、僅かばかりですが臨床医、研究者、教育者としての経験をさせて頂きました。今回、医薬保健総合研究科長を拝命し、微力ではございますが、医薬保健学総合研究科、更には金沢大学の為に全力で取り組ませていただく所存です。同窓会の先生方におかれましては、何卒、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

## 金沢大学大学院先進予防医学研究科長に就任

中村 裕之



金沢大学は、前学長の中村信一先生のご尽力により平成二十四年度文部科学省国立大学改革強化推進事業「真の疾患予防を目指したスーパー予防医学に関する三大学（千葉・金沢・長崎）革新予防医学共同大学院の設置」に採択され、この度、平成二十八年四月に無事に開講しました。新研究科の母体となつてきました革新予防医学教育研究センターの皆様には、これまでその設置に向け、誠心誠意ご尽力頂きました。関係者ならびに医学系教員・職員、さらには本部署事務局の職員の皆様には厚く御礼申し上げます。

その新設の背景には、昨今の医学において予防医学の重要性が格段に向上したことにあります。元来、衛生・公衆衛生学の領域がこの分野を担当して参りましたが、衛生・公衆衛生学の分野だけではなく、臨床系の諸分野が有機的な連携のもと担当して初めて、健康寿命の延伸とQOLの向上というその本来の目的を全うできることが明らかになってきました。このような予防医学の広範性は従来

の衛生・公衆衛生学の枠組みでは当然、

賄いきれるはずもなく、幅広く内科系を中心とする臨床医学分野あるいは予防医学の学問的基盤となる基礎系の分野と一体となった学問体系を築く必要があります。また、その目的を達成するために従来の予防医学的手法では十分ではなく、新たな方法論としてオミクス情報からマクロ環境情報まで個人と環境の特性を網羅的に分析・評価し、〇次予防から三次予防までを包括して個別化予防を目指すことを提唱しました。その学問的基盤の充実のために、この度の先進予防医学研究科の新設となりました。

先進予防医学研究科は、当面、一研究科一専攻の体制となり、その一専攻は先進予防医学共同専攻という国内の国立大学医学系における初めての共同大学院となります。この共同大学院は千葉大学、金沢大学、長崎大学（以下、構成大学）と一緒に共同教育課程を設け、構成大学がその長所を持ち寄る仕組みによって、所期の目的を達成するねらいがあります。したがって、カリキュラムは構成大学の長所を生かした大変、ユニークな編成となり、またその方法は、遠隔講義に代表される新しい教育システムに基づいております。それ以外に、次の特徴があります。（一）学位は、共同教育課程を構成大学の連名により、授与される。（二）学生は、各構成大学に在籍するが、主指導教員（主として研究指導を担当する専任教員）が在籍する大学に本籍（学

# 医学系長・医学類長に就任

多久和 陽



平成二十八年四月一日から医学系長および医学類長を拝命しました。これからの二年間、教員の所属組織である医薬保健研究域・医学系と学部学生の教育組織である医薬保健学域・医学類の舵取りを担当させていただきます。金沢大学医学系・医学類では、私たち教員がこれまでも増して力を合わせ、世界水準の研究者・医療者の集団として医学・医療の進歩に貢献するとともに、これからの医療、研究、行政の各方面におけるリーダーとして活躍する人材の豊かな育成をめざし尽力したいと思えます。

医学系の運営については、国立大学改革において「三類型（地域に貢献する大学、特色ある大学、世界水準の研究大学）」の「世界」を選択した金沢大学の中で、医薬保健研究域の中核を成す医学系は医学研究・生命科学研究を牽引する使命があります。その目的に相応しいポストの有効活用が重要であり、この二年間で医学系は十四名のえりすぐりの教授を新しくお迎えいたしました。医学系は、文部科学省から求められた金沢大学

医学系のミッションの再定義において、自らが脳・がん・循環・環境医学に関する先導的研究の展開を、ミッションとして策定しました。創造性、新規性の高い研究を推進するために、これらの分野で研究拠点を構築し、研究成果を研究費獲得と研究のさらなる発展につなげます。また、各研究分野や研究クラスターにおける研究の活性化とともに、若手研究者育成のためのプログラムを充実させ、次の世代の研究者育成にもこれまでも増して力を入れます。

医学類教育では、数年後に迫った「国際基準」に対応した医学教育の外部評価（国際認証）の受審を見据えて、専門課程教育は約一〇年ぶりの新カリキュラムを平成二十八年度入学生からスタートさせます。これは全学的な教育改革とも歩調を合わせ、教育委員会を中心に二年をかけて準備したものであり、参加型臨床実習の充実はもちろんのこと、能動学習、臨床医学の早期導入、シミュレーション教育、医学類生の国際交流、研究者育成教育を重視しています。医学教育国際認証の取得は医学部にとってたいへん重要な意味を持ちます。国際認証の取得には今後数年を要し、取得後も継続的な点検・改革が求められます。その他、理系一括入試や英語外部試験導入などの全学的な入試制度改革に、医学類に相応しい形で参加します。

なお、新執行部は、以下の副系長・副

籍）を置くことになる。（三）学生は、構成大学の施設等を利用することができ。（四）本籍を置く大学以外の構成大学の副指導教員からも、研究指導が受けられる。

また開講と同時に設置されました金沢大学医薬保健研究域先進予防医学研究センターを研究の軸として構成大学での疫学や予防医学を中心とした共同研究を推進しております。

新しい先進予防医学研究科は、以上の教育と研究を構成大学とともに展開することによって、今後、益々、重要性が増します個別化予防を実践できる先進予防医学研究者・教育者や、疾患の早期診断法やスクリーニング法により先進予防医学の方法論を臨床現場に応用できる臨床

医・薬剤師などの医療従事者を育成します。同時に今後の地域における超高齢・少子社会の医療・健康・介護・福祉の様々な問題の克服とグローバル化社会の健康問題に対応するために全力を尽くす所存です。

先進予防医学研究科は、既存の医薬保健学総合研究科と独立して存在するものでは決まらせていません。医薬保健学総合研究科とは補完し合う関係にあり、また医学系教員をはじめとする諸先生方の全面的なご支援があつて初めて成り立ちます。是非とも、十全同窓会の諸先生方には、この新しい研究科へのご理解を頂きますとともに、今後ともご指導、ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

学類長（大井章史総務担当、横田崇基礎系教育担当、中尾真二臨床系教育担当、市村宏教育担当、原田憲一入試担当、河崎洋志学生支援担当）となります。

同窓会の皆様には、従前にもましてのご指導ご鞭撻、心強いご支援を賜りますようお願い、どうかよろしくお願い申し上げます。

## お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について寄稿をお待ちしております。

〒九二〇一八六四〇金沢市宝町十三一

金沢大学医学部十全同窓会会報係

TEL 〇七六・二六五・二二二二

FAX 〇七六・二三四・四二〇八

E-mail juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

# 金沢大学附属病院長に就任

蒲田 敏文



平成二十八年四月一日より並木幹夫前院長の後を引き継ぎ金沢大学附属病院院長を拝命しました。私は昭和五十八年に金沢大学医学部を卒業後放射線科教室に入局し、平成二十五年六月に金沢大学大学院経血管診療学（放射線科）の教授に就任しました。平成二十年度より平成二十七年までの七年間医学類の学生の後援会である医王保護者の会の会長を務めてまいりました。教授就任四年目の副院長経験もない私が病院長に指名されることは極めて異例であると自覚しております。金沢大学附属病院を取り囲む環境は年々激しさを増しており、大学本部からは病院収益の向上と臨床研究の推進を要望されています。しかし、病院の収益向上ばかりを追求してしまうと、職員に過度の負担を強いることにもなりかねません。私は、職員が明るく働ける環境を整備することで、金沢大学附属病院で働くことに充実感と喜びを感じて欲しいと思っています。職員の仕事に対するモチベーションを高めることができれば、自ずと収益は改善してくると思えます。

大学病院の大きな使命は、高度の先進的医療を実践することで北陸地域の医療レベルの向上に貢献することと、優秀な人材を育てることです。そのためにも北陸の関連施設との連携は非常に重要なテーマです。病診連携、病病連携、医療情報の共有化を進めて、関連医療施設と共存、共栄をはかりたいと思います。また、金沢大学附属病院ならびにその関連病院で研修する初期臨床研修医・専門医研修医（専攻医）の数も増加させていかなければなりません。平成二十九年度から始まる新しい専門医制度により、研修医が大学等の大病院に集中し、地方の病院に若い医師が派遣できなくなるのではないかとという危惧がされています。大病院のみに医師が集中することは避けなければならぬと思います。金沢大学附属病院長として地域の病院で若い医師が専門医研修ができるように最大限支援をさせて頂く所存です。

なお、新執行部は、山本博病院担当理事、以下の副病院長（谷内江昭宏・医療安全担当、土屋弘行・広報・地域医療連携担当、竹村博文・診療担当、絹谷清剛・総務・人事担当、吉崎智一・臨床教育担当、和田隆志・研究担当、小藤幹恵・看護担当）ならびに以下の病院長補佐（邊見達義・事務担当、矢野聖一・臨床研究開発担当、長瀬啓介・経営企画・医療情報担当、崔吉道・薬剤担当、香田渉・院長業務補佐担当）ならびに金子周一域

長・執行部会議オブザーバーとなります。十全同窓会の諸先生におかれましては、

今後とも金沢大学附属病院に對しまして、指導、ご鞭撻の程宜しくお願い致します。

## 平成二十八年 春の褒章

紫綬褒章

清木 元治

(特別会員)

## 春の叙勲

瑞宝小綬章

中川 幾一郎

(昭和二十六年卒業)

旭日双光章

深谷 桂一

(昭和三十三年卒業)

瑞宝双光章

國吉 勲

(昭和三十七年卒業)

野垣 俊幸

(昭和三十九年卒業)

山本 明

(昭和四十六年卒業)



万が一遺漏がある場合は御寛恕の上お知らせ頂ければ幸いです。

# 教授 就任 挨拶

## 安藤 仁博士 (平成七年卒業)

### 医薬保健研究域医学系細胞分子機能学教授に就任



平成二十八年三月七日付で、医薬保健研究域医学系細胞分子機能学の教授を拝命しました。

私は、平成七年に本学を卒業後、直ちに大学院（内科学第一）に進学し、小林健一教授のもとで内科学を学びました。また、専門領域として内分泌・代謝学を選択し、篁俊成先生（現・内分泌・代謝内科学教授）の指導により、基礎研究を開始しました。大学院在学中には糖尿病治療薬や脂質異常症治療薬の多面的作用を論文報告し、薬物療法に興味を抱くようになりました。そのため、平成十五年から三年間は自治医科大学薬理学講座のポストドクターとして、藤村昭夫教授（本学昭和五十三年卒）のもと、薬理学や薬物療法に対する造詣を深めました。また、藤村先生の専門である時間治療学の研究を行う中で、細胞内体内時計の存在を知り、体内時計の障害が生活習慣病をもたらすのではないかとの仮説を立てました。これを検証するために、その後

の二年間は本学に戻り金子周一教授のもとで、続く八年間は再び藤村教授のもとでデータを蓄積し、細胞内体内時計が糖・脂質代謝の制御に重要な役割を果たしていること、肥満や糖尿病の病態には体内時計障害が関与することを明らかにしました。現在は、体内時計障害を改善する薬の探索に着手しており、体内時計を標的とした生活習慣病の予防・治療薬の開発に向け、研究を継続しております。

医学類生の教育に関しては、薬理学の授業を担当いたします。母校の教壇に立ち、後輩を教育できることは、望外の喜びです。次世代を担う優れた医師・研究者を育てるために、情熱をもって尽力したいと思えます。

最後になりますが、十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともより一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



## 町田 宗仁博士

### 医薬保健研究域医学系国際保健学教授に就任



平成二十八年四月一日付で医薬保健研究域医学系国際保健学教授を拝命しました。十全同窓会の先生方に一言、ご挨拶申し上げます。

小職は高校卒業まで群馬県東部の邑楽郡大泉町に住んでおりました。平成三年に早稲田大学教育学部英語英文学科に入学、英語教員を目指しましたが、当時は教員採用試験が異常なまでの高倍率でした。英語が好きでも生業とすることは難しく、であれば幼少期は病弱だったため医師になろうと方向転換、平成五年に福島県立医科大学に入学しました。卒業後は小児科、精神科、糖尿病内科のいずれかに進もうと教養課程時代に考えていましたが、大学三年生の時に転機がありました。笹川記念保健協力財団が医学学生を対象に、ハンセン病対策、JICAの結核対策、WHO西太平洋地域事務局（WPRO）の感染症対策を見聞するフライピンへのスタディツアーを企画していました。公衆衛生学講座教授の福島匡昭

先生（金沢大学医学部昭和三十四年卒業）のお薦めによりツアーに参加、公衆衛生学という分野のインパクト、保健分野における日本への期待というものの存在を知り、国際協力に興味を持ちました。

臨床実習開始後も、卒業後は社会医学系に進もうとしていたところ、厚生省採用案内を手にする機会があり、厚生省出身の福島教授に相談したところ、まずは受験したらと勧められ、大学六年の秋、厚生省の採用試験を受験、合格しました。ただ、臨床研修を強く希望し、東京災害医療センター、東京医療センターの二つの国立病院で研修後に厚生省へ入省、以後は難病対策、エイズ対策、診療報酬制度運用、研究開発振興、特定機能病院の医療安全対策等に従事、また総務省消防庁では救急救命士制度運用、環境省では公害対策に従事、長野県では佐久保健福祉事務所長として勤務しました。平成二十四年から二年間、学生時代に訪問したWPROに勤務、日本からの任意拠出金に基づく保健事業の運営企画に携わりました。

教育職は初めての経験であり、十全同窓会員の皆様のご指導ご鞭撻を賜りながら、今までの行政経験を教育に活かして視野の広い医師を育てること、また、大学の更なる国際化というミッション等に、微力ながらも貢献できるよう努めてまいります。何卒よろしくお願い申し上げます。

## 笹川 寿之博士

(昭和五十八年卒業)  
金沢医科大学産科婦人科学講座教授に就任



平成二十八年二月一日に金沢医科大学・産科婦人科学講座教授、さらに金沢医科大学付属病院診療科長・金沢医科大学研究科長を拝命しました。

昭和五十八年に金沢大学医学部医学科を卒業し、大阪大学産科婦人科学教室に入局しました。第一線病院の市立豊中病院で三年間の産婦人科初期研修、大阪大学附属病院、大阪大学微生物病研究所婦人科で二年間専門医研修を行い、大阪大学大学院生として四年間大阪大学微生物病研究所・腫瘍ウイルス部門で研究をしました。内容は human papillomavirus-16 (HPV16) のマウス発癌実験で、HPV16型E6-E7遺伝子導入レトロウイルスをマウスの子宮頸部腔に感染させ癌化過程を観察するという博打的な研究でした。苦勞してHPV16型のin vivoでの発がん性を世界で初めて証明しました。そのおかげで英国Imperial Cancer Research Fund (ICRF) の期限付き研究員としてケンブリッジ大学病理のICRF腫瘍ウイルス部門に留学できました。英国では、酵母の蛋白発現系を用いてウイルス様粒子 (virus-like particle: VLP) の生成

分離に成功しました。この技術は、現在行われているHPVワクチンの基になっており、当時、世界中がしのぎを削っていたものでした。私の成果は米国NIHグループの半年遅れとなり、残念ながら、その仕事はほとんど無視されています。

帰国して、金沢大学産婦人科の前任教授、井上正樹先生の助手として、産婦人科臨床とHPVと子宮頸癌に関する臨床的、疫学的研究を開始しました。保健学科看護科、坂井明美先生のもと助教、准教授として十年間看護学生の教鞭をとりながら、ケニアにも行きHPV研究を続けてきました。研究では、市村先生、並木先生にもお世話になりました。

金沢医科大学では、故牧野田知教授のもと、准教授、特任教授、そして現在に至ります。子宮頸部前癌病変に対するフェノール療法、婦人科腫瘍に対するBCG-CWS癌免疫療法、新規癌誘発HPVの解析など実践的研究を行っています。今後、周産期領域では胎児診断や新規早産管理法の確立、婦人科領域では漢方薬や癌免疫治療などを実践し、機能温存slow treatmentという概念を確立したいと考えています。

石川県における産婦人科医不足が問題になっており、特に能登や周辺地区では深刻な状況です。金沢大学産婦人科とも連携して、産婦人科医を増やすための努力をいたす所存です。皆様のご協力をお願い申し上げます。

## 坪川 恒久博士

(昭和六十三年卒業)  
東京慈恵会医科大学  
麻酔科学講座教授に就任



平成二十七年四月一日付けで東京慈恵会医科大学麻酔科学講座教授を拝命しました。

私は、昭和六十三年に金沢大学医学部を卒業し、村上誠一教授が主宰されていた麻酔科学教室に入局いたしました。入局後は、麻酔関連薬の薬物動態を中心に研究をおこない、プロポフォールやオルプリノンなどの臨床導入・普及に努めました。また、手術中の麻酔薬投与をより安全におこなうために電子麻酔記録に連動したシミュレーターを開発し、現在では日本の多くの手術室でリアルタイムに麻酔薬の血中濃度が表示されるようになっていきます。その後、イギリス、プリマス大学大学院に留学し、医学教育や研究デザインなどの単位を取得し、また、いくつかの新薬のPhase Iスタディに参加しました。さらにデリフォード病院のスタッフとして臨床麻酔をおこなってきました。この時に学んだ内容・経験は私の今の礎となっています。

留学中に脳波解析の基礎を学んだことから、帰国後は薬物動態に加えて中枢

神経系の機能解析に興味を持ち、高周波振動や小脳誘発電位などをテーマとして研究をおこなってきました。その延長上で脳磁図を用いた研究をおこなうようになり、文部科学省クラスター形成事業ではアルツハイマー病初期診断方法の開発に、つづいてCOEプログラムのなかでは自閉症の早期診断方法開発などに携わって来ました。

慈恵医大の麻酔科には二百名近い医師が在籍し、三つの分院、ICU、ペインクリニック、緩和も含めた統合の医局として、年間二万例以上の麻酔管理を行っています。国公立から私立、地方から都市部という大きな変化に戸惑うことも多いですが、後進を育てるという意味では共通しており、これからも精進して参ります。今後とも諸先生方のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



## 山上 聡博士

日本大学医学部視覚科学系

眼科学分野主任教授に就任

(昭和六十三年卒業)



平成二十八年四月一日付で日本大学医学部視覚科学系眼科学分野主任教授を拝命

しました。私は昭和六十三年に金沢大学を卒業後、東京大学医学部眼科学教室に入局しました。初期研修後から角膜分野の研究に興味を持ち角膜移植の免疫反応の研究を行い、平成七年から自治医科大学眼科講師として角膜移植の臨床と免疫反応の研究を続けました。ポストンへの留学を経て、平成十四年からは東京大学に戻り角膜の再生医療の寄附講座助教授として角膜上皮層や内皮層の再生医療の

## 櫻井 武博士

筑波大学医学医療系教授に転任



平成二十八年三月三十一日をもちまして、八年半あまり慣れ親しんだ金沢大学を退職させていただくことになりました。月日が経つのは本当に早いものですが、金沢で過ごした時間はとても密度の高いものでした。様々な方々に支えられ、良い刺激

を受けながら大過なく勤めることができました。金沢という美しい街、そして金沢大学を去ることは、名残惜しく、残念なことではございますが、近年、それぞれの大学が特色を生かしながらより強く前進していく必要性が高くなっていることを鑑み、微力ながら私の転出が双方の大学にとって良い結果につながると考え、異動を決意することになりました。

私は平成十九年十一月に金沢大学医学系分子神経科学・統合生理学分野に教授として着任して以来、研究室運営や研究、そして講義や実習を始めとする教育を通して、金沢大学医学系の先生方、皆様方

研究を行い、平成二十三年からは東京大学角膜移植部部長として、多くの角膜移植手術の臨床を経験しながら、角膜の再生医療の研究、臨床に携わってきました。これまで優秀なPhDや大学院生に助けられた恵まれた研究環境のもと仕事をさせて頂けたことに大変感謝しております。

これからは与えられた新任地での任期中に、これまで蓄積してきた新しい再生医療の方法を可能なかぎり早く臨床に届けることを目標にしていきたいと考えております。今後とも諸先生方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

のご指導・ご鞭撻のもと、様々なことを勉強させていただきました。新任地の筑波大学で、これらの経験を大いに生かし、微力ながら教育と研究に邁進していく所存でございます。場所は変わったとはいえ、医学研究という分野で活動が続けるにあたり、今後とも金沢大学の先生方、皆様方にはいろいろとお世話になる機会もあると存じます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。どうかみなさま、これからも健康には十分ご留意されること、そして一層のご活躍を期待しております。さらに金沢大学医学系のますますのご発展を祈念いたします。これまで、本当にありがとうございます。

## 第四十四回医療

功労賞受賞

医療法人社団博友会

金沢西病院 名誉理事長

菊地 誠 (昭和三十二年卒業)

「第四十四回医療功労賞」(読売新聞社主催)全国表彰を受賞致しました。今回は、国内部門九名、海外部門三名、計十二名が受賞されました。平成二十八年三月十四日、帝国ホテルで行われました表彰式において、厚生労働大臣賞が授与され、式の後、夫婦で皇居・宮殿に上がり天皇皇后両陛下に拝謁、天皇陛下よりお言葉を賜りました。

医療功労賞は今年で四十四回、私が金沢市で地域医療の拠点となるよう病院を開いて四十五年になります。この間、医療は目覚ましい発展を致しました。尊い人の健康や命を守るため、国と民間が手を繋ぎ、その人の、今の状況に合わせたいくつもの提供ステージを整えて参りました。その結果、世界に比類ない「居心地が良く、暮らしやすい高齢社会」をつくりあげることができたと思っております。この「居心地が良く、暮らしやすい社会」の更なる発展に対して、地域の健康を守り、しっかりとその役目を果たし続けてゆきたいと思っております。そして、この名誉ある医療功労賞が、これからも私共のような地域健康づくりに、医療・福祉関係者の励みとなつてゆくことを確信いたします。

退職ご挨拶

## 泌尿器集学的治療学分野

並木 幹夫



平成二十八年三月三十一日をもちまして、金沢大学医薬保健研究域医学系泌尿器集学的治療学分野教授を定年退職いたしました。平成七年十一月に大阪大学から金沢大学医学部教授として赴任してから、あつという間の二十年でした。在職中の思い出は数限りありませんが、ここでは主な業績を記させていただきます。

臨床面においては前立腺癌に対し手術・放射線療法・ホルモン療法を駆使した集学的治療により、前立腺癌の治療成績向上に努めて参りました(最近の統計では北陸地区の前立腺癌死亡率が全国でも低いことが報告されています)。また、ホルモン不応性前立腺癌、骨転移を有する前立腺癌に対する新たな治療戦略の向上にも貢献しました。現在、限局性前立腺癌に対するホルモン療法の有効性に関する全国大規模観察研究、ハイリスク前立腺癌に対する小線源・外照射併用放射線療法における補助ホルモン療法の有効性に関する全国大規模臨床試験など多くの臨床試験を主導しています。男性学分野では、日本泌尿器科学会・日本Men's

Health医学会合同による「加齢男性性腺機能低下症候群(LOH症候群)診療の手引き」作成委員長を務め、平成十九、二十一年度厚生労働科学研究費補助金事業班長としてLOH症候群に対する男性ホルモンの有効性を証明しました。

基礎研究では前立腺癌の造骨性骨転移モデルを樹立し、癌細胞の骨内浸潤の機序に骨芽細胞由来のケモカインが関与し、その受容体が前立腺癌細胞内で重要な働きをしていることを明らかにしました。また、ホルモン抵抗性獲得の機序に、副腎由来アンドロゲンの前立腺癌細胞内代謝(intracrine)が関わっていることを明らかにしました。さらに、その担い手として前立腺癌細胞のみならず間質細胞がparacrine的に重要な働きを果たしていることを証明しました。男性学分野の研究としては、精子形成障害におけるY染色体上の遺伝子AZF(azoospermia factor)やsmall RNAの関与について明らかにしました。特にY染色体に関する研究は国際的に高く評価されており、男性不妊症診断用Y染色体微小欠失診断キットが臨床応用されるに至っています。平成十九年度から始まった文部科学省補助金による「北陸がんプロフェッショナル養成プログラム」及び「北陸高度がんプロチーム養成基盤形成プラン」の統括コーディネーターとして、金沢大学のみならず、富山大学、福井大学、金沢医科大学、石川県立看護大学の医療人養成に

貢献しました。また、金沢大学附属病院長在任中は、様々な難題、厳しい病院経営に対し職員一丸となって乗り切ることが出来ました。

学外活動としては、日本アンドロロジー学会理事長、アジア太平洋性機能学会President、日本性機能学会理事長を務めるなど男性学の発展に貢献しました。また、日本思春期学会理事長として青少年教育および社会への啓発活動を積極的に行っています。また、三回の国際学会

を含む多くの全国規模学会を主催して、地域振興にも貢献しました。

以上のように、多くのことを成し遂げることが出来たのは、教室員の頑張りにも負うところが大きいですが、金沢大学の皆様、十全同窓会の皆様、多くの皆様のおかげと感謝の気持ちで一杯です。これからは、微力ながら皆様に恩返しをさせていただきたく存じますので何卒よろしくお願い申し上げます。

## 分子情報薬理学分野

吉本 谷博



六十三年四月に助教に昇任し、平成六年一月に金沢大学薬理学教室の教授として迎えていただきました。

これまで一貫して生理活性脂質、特にアラキドン酸代謝に関する酵素と病態生理学の研究を行ってきました。アラキドン酸に酸素添加する酵素であるリポキシゲナーゼの研究では、哺乳動物にはリポキシゲナーゼは存在しないといわれていたが、動物組織に多くの種類のリポキシゲナーゼが存在することを明らかにし、「動物組織のリポキシゲナーゼの研究」で昭和六十三年度日本生化学会奨励賞を受賞しました。また、血小板凝集に関わるトロンボキサン合成酵素の阻害薬を見いだし、この化合物(OXY-046)は国内製薬企業に委譲されて臨床治験が行われ、現在ではオザグレールとして薬理学の教科書にも記載され、脳梗塞、特に急性期ラ

昭和五十年三月に広島大学医学部を卒業し、京都大学大学院医学研究科(医学化)学教室、早石修教授に入学しました。大学院を修了した昭和五十四年に指導教官であった山本尚三助教授が徳島大学医学部生化学教室の教授に転任されることになり、四月から徳島大学医学部助手として採用されました。昭和五十九年四月から二年半ほど、米国ボストンのハーバード大学医学部免疫学教室のFrank Austen教授の研究室に留学しました。帰国後の昭和

## 並木 幹夫教授 退職記念講演会

平成二十八年三月八日(火)、本年三月末日をもって医学系教授をご退職された並木幹夫教授の退職記念講演会が医学類G棟二階 第三講義室で開催されました。

記念講演会で、並木教授は「泌尿器科医として夢を信じて歩んだ四十年」と題し、四十年余にわたる研究・診療・教育活動を振り返られました。講演会には、多くの教職員、学生、十全同窓会会員が参加し、ご講演に耳を傾けました。並木教授は昭和五十年に大阪大学を



卒業後、国立大阪病院などで臨床医としてのご経験を積まれ、昭和五十七年に大阪大学医学部泌尿器科学講座助手に着任されました。その後、同講座の講師、助教授を経て、平成七年十一月に本学医学部泌尿器科学講座の教授に就任されました。

基礎研究では前立腺癌の骨転移・ホルモン不応性機構、排尿機構、Y染色体の機能解明に関する研究、臨床研究では、前立腺癌、加齢性男性性腺機能低下症候群、男性不妊に関する研究など、基礎研究で得られた知見を臨床応用することにより大きな成果を挙げられました。具体的には、前立腺癌に対する手術・放射線療法・ホルモン療法を中心とした集学的治療法の確立、ホルモン不応性前立腺癌、骨転移を有する前立腺癌に対する新たな治療戦略の構築により、治療成績向上に貢献されました。また、前立腺癌の造骨性骨転移モデルを樹立し、癌細胞の骨内浸潤の機序に骨芽細胞由来のケモカインが関与し、その受容体が前立腺癌細胞内で重要な働きをしていることを明らかにしました。精子形成に関わるY染色体上の遺伝子AZF (azoospermia factor)の研究により、男性不妊の原因の多くがAZFの微小欠失であることが明らかになり、AZF微小欠失検出キットを開発し臨床応用に結びつけました。また、加齢による男性ホルモン低下が様々な障害をもたらす「加齢性男性性腺機能低下症候群」の病態を明らかにし、

クナ梗塞の重要な治療薬となっています。

平成十三年四月には医学系研究科大学の分子情報薬理学の教授となり、学生・大学院生の教育に尽力してきました。現在は附属病院・外来棟など宝町キャンパス整備の最終段階であります。これに先立つ基礎系研究棟の再開発計画では検討委員長を勤めさせていただきました。ここでは、解剖棟の新築と渡り廊下、旧南棟四／五階部の増床、教育棟二階の学生学習室などを整備できたことや、私が提案したA/G棟の名称が定着したこと、私を大変嬉しく思っています。また、平成十六年十月より平成十八年三月まで附属図書館医学部分館長を勤めさせていただきました。さらに全学においては、平成十二年度および十三年度には総合情報基盤センターのネットワーク管理専門委員会委員長として、現在の学内情報ネット

.....

我が国初の診療ガイドラインを作成されました。この他にも、脳梗塞ラットやアルツハイマー型痴呆類似ラットを作成し、大脳皮質グルタミン酸NMDA受容体やGABAニューロンなどの関与を明らかにしました。

これらの一連の研究活動に対し、平成元年五月 第六回稲田賞、平成十八年五月 第十六回ブルガリア国際医学会賞、平成二十五年十月 臓器移植対策推進功労者に対する厚生労働大臣感謝状、同年十一月 北國文化賞を受賞されました。

また、並木教授は学会長を歴任され、第二十四回日本性機能学会学術総会及び第十四回アジア太平洋性機能学会、第百三回日本泌尿器科学会総会などをご

ワークのインフラ整備に尽力しました。また、平成十四年七月十九日より平成十六年三月三十一日の間当時の林勇二郎学長の学長補佐を勤め、現在の三学域体制への再編作業に関与させていただきました。

学会活動では、日本生化学会の理事を三期勤め(平成九年より二年間と平成十三年より二年間)、特に編集担当常務理事(平成十七年より二年間)の間は日本医学会が編纂した医学用語辞典(第三版、二〇〇七年三月出版)の編集に学会代表として関与しました。また、二〇〇五年六月には第四十七回日本脂質生化学会を金沢で開催させていただきました。

最後になりましたが、これまで二十一年あまりの長い間金沢大学医学部や十全同窓会の皆様方のご厚情に感謝申し上げます。

.....

担当されました。

平成二十六年には金沢大学附属病院長及び金沢大学副学長に就任され、附属病院の管理・運営にご尽力されました。また、北陸がんプロ統括コーディネーターとして、優れたがん医療の担い手であるがんプロフェッショナルの養成にも努められました。

素晴らしいご講演であり、拝聴された皆様は深く感銘を受けておられました。ご講演後には、感謝の意を込めて花束の贈呈が行われました。また、並木教授の長年のご功績を称え、盛大な拍手が送られました。

(金子 周一 記)

## 被災地域同窓生に

## 会長から見舞い状

## 熊本地震のお見舞い

十全同窓会熊本支部・大分支部 会員各位

去る4月16日午前1時25分マグニチュード7.3の地震を本震とした熊本地震から本日で1週間が経過いたしました。阪神淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災にも匹敵し、史上初の震度7の同時観測も判明されるなど過去に経験のない大地震であります。

十全同窓会熊本支部、大分支部の皆様におかれましては、家屋の倒壊、身体的損傷など被害を蒙ってはおりませんでしょうか、心からお見舞いを申し上げます。

現在もなお活発な地震活動が続いており、寸断された道路、孤立した町村、ライフラインの途絶、避難所での集団生活など幾多の災害が日々報道されております。

官・民の災害対策が比較的早期に始められているとはいえ、一日も早く日常生活に復帰されますよう、衷心からお祈りいたします。本来なら直ちに参上して身をもって支援いたすべきところですが、とり急ぎ書面にてお見舞い申し上げます。

平成28年4月21日

十全同窓会会長 中村 信一

十全同窓会理事長 大井 章史



写真1 震災前の熊本城の大小二つの天守閣

平成二十八年四月十四日二十一時二十六分、十六日一時二十五分と立て続けに熊本県を震源に起こった最大震度7の地震により、熊本の風景や日常の様子は一変しました。熊本の象徴でもあった熊本城では、屋根から瓦が落ち、石垣は大きく崩れ、見るも無残な姿になりました(写真1、2)。二度の震度七を記録した益城町の惨状は、既に報道もされているので皆様もご存じのことと思います。深夜に発生した地震により震度六強を記録した熊本市中心部では、一部の建物の倒壊はありましたが、多くは倒壊を免れ

## 平成二十八年(二〇二六年)熊本地震と十全同窓会熊本支部再開のご報告

ています。ただ、倒壊を免れた建物でさえ、その内部において物が激しく転倒して外観以上に内部の被害は深刻です。とりわけ、県立劇場、映画館、ショッピングモールといった施設では、天井の崩落といった被害もあり、再開の目処も立たないと聞いています。児玉公道先生(昭和五十一年卒業)が学院長を務められる九州中央リハビリテーション学院では、講義室と実習室に被害がためたため、ゴールデンウィーク明けまで休講になりました。また、近くの白川橋が段差発生で通行止めになったため、通勤・通学にも支障がでています。私の勤務する熊本大学でも講義室と実習室に被害がでしたが、それ以上に機器や設備の転倒による被害が甚大です。唯一無事だった建物は、免震建築の医学部付属病院の中央診療棟だけと聞きました。ただ、熊本市の水道水が使用できず、診療のために自衛隊から毎日水の供給を受けています。本記事を執筆中の現在五月九日に、熊本大学では講義・実習が再開され、県内の小中高等学校でも順次授業が再開と報道されています。依然として毎日余震が起きているので、日常を取り戻すためにも、一日も早い地震の終息が待たれています。

十全同窓会会長の中村信一先生からは、震災の直後にお見舞いの連絡をいただきました。また、会員の先生方におかれましても、直接的あるいは間接的に熊



写真2 震災により屋根瓦の失われた天守閣

本にご支援をいただき感謝を申し上げます。金沢大学附属病院からも救護チームが被災地の診療に携わったとうかがいました。この様な非常事態だからこそ、十全同窓会の繋がりが最も強い絆であることと、身をもって知ることができました。私事で恐縮ですが、同級生の長田信人先生と宮内修先生（平成六年卒業、教え子でもある有賀啓之先生（平成十五年卒業）には震災直後の物資不足を補って余りある援助をいただき、私だけでなく周りの多くの職員・学生が助かりました。また、先輩、同級生、後輩を問わず、多くの方からお見舞いの連絡をいただき、離れていても金沢大学をこれほど身近に感じたことはありませんでした。現在、熊本県には、児玉公道先生、齋藤和也先生（平成二年卒業）、磯部博隆先生（平成六年卒業）、中村博喜先生（平成八年卒業）、宮

里賢和先生（平成十九年卒業）と若山友彦（平成六年卒業）の六名の十全同窓会会員がおります。震災直後に、電子メールや電話を使って全員の安否確認をし、幸い、全員が無事であることが確認されました。

熊本県には、十全同窓会熊本支部がありますが、平成二年の総会を最後に中断していました。熊本支部は、平成元年、当時の熊本大学医学部外科第一講座に川筋道雄先生（昭和四十九年卒業）が教授として赴任されたことをきっかけに児玉公道先生が発起人となって発足し、同年十一月二十三日に熊本市内の「青柳」で総会が開かれました。当時の支部長は故宮島孚先生（昭和二十七年卒業）が務められました（会報百二十号）。第二回の総会が翌年七月十三日・十四日に芦北町で開催されました（会報百二十三号）。今年、二十六年ぶりに熊本支部総会を、第一回の総会と同じ「青柳」で、四月二十三日に開催する計画を進めておりました。しかしながら、一週間前に震災が起こつてしまい、延期せざるをえなくなりました。ただ、会員により支部長を児玉公道先生、支部長代理・幹事を若山友彦が務めることが承認されました。震災により「青柳」も大きな被害を受けましたが、ゴールデンウィーク明けには再開するとの電話連絡を受けています。今年中には、熊本支部総会を「青柳」で開催したいと思えます。その記事を同窓会報にご報告することをお約束して、平成二十八年（二〇一六年）熊本地震と十全同窓会熊本支部再開のご報告といたします。

（若山 友彦 記）

## Student Doctor 認定証授与式

平成二十八年四月十四日、四年次の履修とCBT、OSCEを乗り越え五年生となった私たちは、Student Doctor認定証授与式を迎えました。真新しい白衣をビシッと着こなす同級生達が集い、医学部長から一人一人が「Student Doctor」の称号を授けられました。

「Student Doctor」という聞きなれない称号ではありますが、授かった時、講義室から臨床の場へと学ぶ場所がシフトしていくのが感じられました。今までは講義室で同級生に囲まれ、座って講義を受けてきましたが、これからは病院に出る自分から動き、臨床がいかなる場所かを学んでいく必要があります。医療の現場という社会のなかで私たちも一人一人として責任を持って行動しなければなりません。また、患者さんから医学を学ばせていただく立場であるので、常に患者さんに対する感謝と敬意を持ち続ける、ということも忘れてはなりません。

このような、実習をしていくにあたって必要なこと、忘れてはならないことが式にて先生方のお言葉をいただいでいくうちに私たちに刻みこまれていきました。「Student」から「Student Doctor」になったように、これからは学生の殻を破り、責任感を持って真摯に臨床実習に取り組んでいきたいと思えます。昔からの夢であった白衣を着た医師に一步一步近づいていき嬉しく思うと同時に、今までお世話になり続けた両親や祖父母、友人や先生方、私の周りの皆様への感謝の気



持ちも深まりました。将来、立派な姿を見せるのが恩返しだと思っておりますので、この二年間をやりあるものにし、自分を成長させていこうと決意しました。医師のように病気をどうこうできるような存在ではありませんが、「Student Doctor」の称号を得たからには、患者さんに少しでも安らぎや幸せなどの利益を与えられるようにこの二年間を過ごしていきたいと思えます。

最後に、「Student Doctor」認定証授与式を催してくださった先生方や学務係の方々、そして関係者の全ての皆様ありがとうございました。

（鈴木 徳孝 記）

## 北陸再生医療協議ネットワーク設立経緯と抱負

### 一般社団法人北陸再生医療協議ネットワーク・理事長

古川 侃

す。例えば、再生医療を提供する医療機関は、厚生労働省

この度、十全同窓会報編集委員会から当ネットワークの設立経緯と今後の抱負を問われました。貴重な誌上を拝借して本会を紹介し、再生医療について若干論ずることができることを大変光栄に存じます。

#### 再生医療に係わる新しい法的枠組みの整備

平成二十二年九月、京都の某韓国系クリニクにおいて実施されていた幹細胞治療で、肺塞栓による死亡事故が発生したことをきっかけに、これまで何も規制がなかった再生医療分野において急速に法規制が整備されました。例えば、国の成長戦略の下、平成二十五年五月に公布された「再生医療を国民が迅速かつ安全に受けられるようにするための施策の総合的な推進に関する法律」に基づき、次々と画期的な制度的枠組みがダイナミックに構築されつつあります。これまで医薬品と医療機器だけの分類しかなかった薬事法を改正し「再生医療等製品」を新たに分類した改正薬事法（薬機法）、と「再生医療等の安全性の確保に関する法律」、再生医療等安全性確保法（再生医療新法）が制定されました。

#### 北陸再生医療研究会の発足

法規制が整備される一方で、再生医療新法に対応したインフラ整備の不足により、これまで実施されてきた再生医療の継続が困難となる可能性が危惧されま

から認定された委員会での審査手続きを経てからしか提供することができませんが、この認定委員会が不足することが懸念されるからです。また、企業等への細胞加工委託が認められたものの、県外等への細胞加工施設への委託には、輸送に耐えられるだけの保存技術の同時開発などが不可欠となります。また、患者が再生医療を正しく理解することは、適切な普及発展に不可欠であり、透明性の高いタイムリーな情報発信と、医療機関のみではなく再生・細胞医療にかかわるすべての関係者が綿密に連絡を取り合い、患者情報を含めた個別の患者に対する情報の共有が必要と考えられます。このような環境を効率的に整備するためには、北陸域内に存在する優れたリソースや既存の仕組みを活用し、産学官医師が連携した新しい事業モデルを示していく必要があると結論しました。このことは政府の「地方創生」の趣旨にも合致すると考えられます。北陸新幹線の開通によりヒト・モノの流動性の活性化が起き、これまでとは全く異なる新しい発想で事業モデルを提案することができると考えられます。その実現のためにスタートとして、平成二十六年十二月北陸再生医療研究会を発足させました。研究会では、約三〇社にも及ぶ企業の有志の参加を得て活動を開始しました。具体的には、北陸地域における再生医療の実施状況の実態を把握するとともに、北陸地域における強み

あるいは弱みを踏まえ、再生医療の健全な普及発展と研究開発の促進や、新規産業の創出、及び関連産業の発展のための課題や解決策を討議してまいりました。

#### 北陸再生医療協議ネットワークの設立

有志で構成された上記の北陸再生医療研究会では、新しい事業環境の下で必要とされるインフラやその条件等について精力的に研究、検討が行われました。その結果、石川県など北陸三県で既に整備されている地域医療に係るさまざまな仕組みを活用した事業活動の必要性が提言され、平成二十八年一月二十三日に当ネットワークを設立するに至りました。

#### ネットワークの活動方針と業務内容

① ネットワークの会員となる会員企業は、改正薬事法の下で製品を開発する企業（再生医療技術の開発も含む）と再生医療新法の下で再生医療を提供する医療機関の業務を支援する企業との二種類が存在します。これら企業と同じく会員となった医療機関とのマッチングの機会を設けたいと考えています。医療機関の多くは、再生医療を提供するための体制をどのように構築すればよいのかもわからないと聞きま

の機会を設けていくことも重要と考えています。

③ 透明性を高めるための審査機関として、北陸域内を中心とした産官学医師で構成された認定再生医療等委員会を設置し、第三者的に審査可能な体制を構築します。すでに数名の先生方から委員就任のご内諾をいただいています。地元金沢大学をはじめとするアカデミアからも、北陸域内での特定認定再生医療等委員会の設置も強く求められています。

④ 患者を含む一般や会員に対する最新の規制関連情報や、認定再生医療等委員会を通じて再生医療を提供する医療機関や安全性に関する情報などを、セミナー等を通じて正確に伝えていきたいと考えています。そのためには、アカデミアからの支援や、行政当局、規制当局との情報共有や協力が欠かせません。まずは正確な理解と認知度の向上を目指し、この啓発活動を中心に実施していきたいと考えています。

最後に、本ネットワークにおける活動は、再生・細胞医療分野において、医療機関を含めた環境整備を民間主導で実施する他に類を見ない全く新しいコンセプトに基づくものです。本ネットワークは、その関係者がそれぞれの立場と役割を明確にし、相互の理解の下で協力体制を構築することで実現すべく、活動して参ります。十全同窓会の諸先生方のご支援、ご協力をお願い申し上げます。また、ご興味を持っていただいた先生がおられましたら、ご入会の上、積極的な活動を賜りますようお願い申し上げます。

病院紹介

石川県済生会金沢病院

沿革

当院の母体、済生会は明治四十四年、天皇の済生勅語「恵まれない人々のために施業救療事業を起こすように」と恩賜金一五〇万円（当時）を基に創立されました。現在、日本最大の社会福祉法人恩賜財団済生会として、皇位継承第二位の秋篠宮殿下を総裁に頂き、三つの目標（生活困窮者を濟（すく）う、医療で地域の生（いのち）を守る、会を挙げて医療・福祉の切れ目ないサービスを提供する）を掲げ、病院、老人・児童福祉施設、訪問看護ステーションなど全国三七九の施設で、約五万八〇〇〇人の職員が活動しています。当院は本会が展開する全国七十九病院の一つで、金沢大学関連としては、他に済生会富山病院、済生会高岡病院、福井県済生会病院があります。

当院の起源は、昭和十一年金沢市本町に開設された済生会金沢診療所に求められ、丁度今年が創立八十年目に当たります。昭和十三年病院（二七床）となり、「施業救療」の精神を原点とする無料低額診療事業を積極的に推進するなど、地域社会に密着した診療活動を行ってきましたが、平成六年十月、医療の拡大・高度化とシステム化を目指して金沢市赤土町に移転新築し、許可病床二六〇の地域中核病院として再出発致しました。

移転後のあらましを順に述べますと、平成七年一月緩和ケア病棟（二八床）を

開設し、石川県におけるがん緩和医療の先駆けとなるとともに、同年六月には開放型病院として地域に開かれた医療の実践を目指し、当時市内で最初となる開放型病床二〇床の承認（現在二四床、登録医一五〇名）をいただきました。続いて、十四年回復期リハビリテーション病棟（四五床）を開設、十八年には隣接する県リハビリセンターの指定管理者を受け、チーム医療を基盤としたリハビリ医療の充実を図りました。さらに、二十年が在宅療養患者に対する相談・支援や在宅緩和ケアの普及・啓発に取り組む目的で、県の国庫補助事業「県在宅緩和ケア支援センター」を院内に開設しました。二十五年には同センターを継承・発展させる形で「がん安心生活サポートハウス」を県社会福祉会館に開設し、が在宅緩和医療の一層の充実を図っています。

現況

診療科と常勤医師（計三十二名）のうちわけは内科（十名）、消化器科（四名）、外科（四名）、整形外科（五名）、泌尿器科（一名）、眼科（一名）、リハビリテーション科（三名）、麻酔科（二名）、放射線科（一名）、健診部（一名）です。神経内科、皮膚科、心臓血管外科、脳神経外科は外来診療のみです。泌尿器科、脳神経外科を除く診療科の医師は全て金沢大学から派遣していただいております。十全同窓会の皆さまにはこの紙面をお借りし厚く御礼申し上げます。平成二十六年度の取り扱い患者数は、一日平均入院二一人、外来四四〇人でした。沿革でも述べましたように、金沢西南

部地区の中核病院としての急性期医療にくわえ、地域ニーズの高いがん緩和、回復期リハビリ医療にも積極的に取り組んでいます。その特徴や経緯を踏まえ、急性期医療を担う消化器・外科、整形外科、内科とそれぞれ対応するがん緩和、回復期リハ、透析医療との患者の流れや院内連携を重視した診療、すなわち「消化器を中心としたがん疾患の早期診断から治療、緩和ケアまでの一貫した取り組み」、「整形外科領域での機能再建に向けた積極的治療と専門的かつ総合的なりハビリによる社会復帰の促進」、「生活習慣病に対するチーム医療を重視した総合的な取り組み」を診療の三つの柱と位置付けています。とりわけ、当院のがん緩和医療や脊椎・関節領域の観血的治療は石川中央医療圏におけるシェアも高く、さらにニーズが高まること予想されるリハ科については、二十八年度から常勤医三人体制とし、回復期リハ病棟入院料一体制強化加算の獲得を目指しています。

展望

二〇二五年に向け地域医療構想が策定されようとしている中、現病院機能（七対一急性期、回復期リハ、がん緩和）を堅持していくことが当院の独自性を発揮することに繋がることから、病院経営上最もメリットがあり、ひいては地域の医療・福祉にしっかりと貢献できる近道であると考えています。しかし、今回の診療報酬改定における「重症度、医療・看護必要度」の基準値の引き上げ等、国が一律に押し進めている急性期病床削減策に当院も翻弄されています。結果によって、一部地域包括ケア病棟への転換を

めた病棟再編が必要となりますが、いずれにしましても、社会の動向や地域ニーズを見極め、患者さんや職員に選ばれる病院運営に取り組んでいきたいと考えています。今後とも金沢大学ならびに十全同窓会の皆様のご指導ご支援を宜しくお願い致します。

（院長 若林 時夫 記）



# 病院紹介

## 福井総合病院

福井県福井市の北西部に位置する福井総合病院は、地域の中核病院として昭和三十七年に設立され、平成二十四年に創立五十周年を迎えました。

【関連施設】 括弧内は開設年

福井総合病院(昭和四十二年)

三一五床

福井総合クリニック(平成二十一年)

一九床

福井病院(精神病院)(昭和三十七年)

一一二床

新田塚ハイツ(老健)(昭和六十三年)

定員 一四四名

新田塚ハウス(特養)(平成五十二年)

定員 一五〇名

新田塚デイケア(平成元年)

定員 三五名

新田塚デイサービス(平成十年)

定員 四〇名

福井北包括支援センター(平成十八年)

新田塚介護相談センター(平成十一年)

新田塚訪問看護ステーション(昭和六十一年)

福井医療技術専門学校(昭和五十二年)

リハビリ学科 理学療法学

定員 五〇名/年

福井医療短期大学(平成十八年)

(アスレティックトレーナー併修)

一〇名/年

作業療法学 定員 四〇名/年

福井医療大学(四年制)

(平成二十九年予定)

言語聴覚学 定員 三〇名/年

看護学科 定員 六〇名/年

新田塚保育園(昭和四十二年)

定員 一三〇名

福井メデイカル(昭和六十二年)

義肢装具製作

関連施設は以上の通りとなっております。医療を中心に保健・福祉・保育・教育の育兒から教育までの一貫した、総合的な医療ケアサービスの提供が行える環境を兼ね備えています。規模拡大による敷地の狭小化と建物の老朽化により、平成二十一年五月「福井総合病院」を福井市の新田塚から江上町に新築移転し、平成二十三年四月に新田塚の跡地へ「福井総合クリニック」を新築しました。福井総合病院では入院と救急患者を受け持ち、急性期病棟、回復期病棟、地域包括ケア病棟を有し、最先端の治療と充実したリハビリテーション体制による質の高い医療を提供し続けています。福井総合クリニックでは外来診療を行うという、完全な別病院として、病・診分離型の医療を実践しています。福井総合病院では外来診療による喧騒を取り除き、院内放送も廃した病棟は、本当に静かな入院環境となっております。(写真1)

患者は、近隣住民を中心に福井県内全域から訪れ、脳血管疾患、リハビリテーション、整形外科疾患(脊椎、関節リウマチ、肩・肘・膝・足関節、関節鏡手術、スポーツ傷害)の治療は特出しています。当院は、「福井県リハビリテーション支援センター」「福井県高次脳機能障害

写真1



修理が可能となっております。

平成二十四年四月より、平成三十年の福井国体に向けた取り組みの一環として、福井県より「福井県スポーツ医科学センター」の委託を受けています。毎年、福井県国体候補選手約二、〇〇〇人に対し、アンケートによる問診を行い、問題のある選手に対し福井県スポーツ医科学センターにて、医師、アスレティック理学療法士による総合的な診断と指導サポートをしています。選手の競技力向上の一翼を担っています。

当院は、各科が連携し、患者さんのあらゆる疾患を診られる総合病院でありながら、家族や近所の友達と連れ立って来院されるといった開業医に近い雰囲気があります。そのため、患者さんだけでなく周りの人たちも支えていくことができるように、検査や手術など様々な選択肢を提案できる診療を心がけています。どのような症状の患者さんが来られても幅広く対応できる技術と人員を確保しながら、今後とも地域に根差した医療を提供したいと思っています。

「福井市北包括支援センター」を委託されております。福井総合病院には一、一三〇㎡、福井総合クリニックには五八四㎡の広さをもつ全国屈指のリハビリテーション室を備え、理学療法、作業療法は部屋を区切らず広い空間で実施しており、スタッフの連携がとりやすく、より全人的なりハビリを可能とします。他に、言語聴覚室八室と無響室一室を備えています。(写真2) 理学療法士十八二人、作業療法士五九人、言語療法士三十三人の全施設総勢一七四人にのぼるスタッフ数で、「三六五日リハ」を実施しています。福井医療短期大学の学生にとつて、当院は非常に充実した実習施設となっております。常勤の義肢装具士も二人おり、患者さんに合った装具や自動具をリハビリと連携して速やかな製作と

写真2



林 正岳 記

## 教室だより

### 細菌学

#### (旧細菌感染症制御学)

##### 教室の沿革

日本の細菌学はドイツの流儀を汲んで衛生学の中に含まれて成長しました。本学で細菌学の名前が最初に現れるのは、明治四十五年であり、衛生学、細菌学教授の上田計二に始まります。上田教授は衛生学、時として医化学、そして細菌学を教授していました。大正四年に金沢医学専門学校教授を拝命した第二代教授の児玉豊治郎は、引き続き衛生学、細菌学の教授となっておりましたが、その研究論文のほとんどは細菌学(結核)に関するものでした。大正十二年四月に本学は医専から医科大学に昇格しました。同年五月に第三代教授として下條久馬二が医専教授となりました。下條教授は大正十四年に退職し、台湾熱帯研究所長となりました。医科大学の発足の後に細菌学教室は衛生学教室と分かれました。大正十四年に第四代教授の谷友次が初めて『細菌学教室』として医科大学教授を拝命しました。在職中の谷教授は主に梅毒の研究に従事し、その成果は、昭和三十三年来沢された天皇陛下に御前講義を申し上げるなど輝かしいものでした。本教室は、戦後にウイルス、真菌学を含んで微生物学教室と改称しました。昭和三十四年に三十余年の教室主任を務めた谷教授の跡を継いで、第五代教授として西田尚紀が金沢大学医学部微生物学教室教授に就任しました。西田教授は、ジフテリ

ア菌およびクロストリジウム属菌を主な研究対象とし、その研究成果は欧米の代表的な微生物学の教科書に引用されておりました。昭和六十一年には中村信一が第六代教授となり、クロストリジウム属菌を中心とした研究に従事しました。中村教授による本属の新しい分類法や新種の発見などは、世界の権威のある嫌気性菌マニユアル、教科書に広く記載されています。中村教授が平成十六年に金沢大学理事・副学長に就任した後(平成二十年、国立大学法人金沢大学長に就任)、平成十六年十二月に第七代教授として清水 徹が金沢大学大学院医学研究科・細菌感染症制御学講座の教授に就任しました。清水教授が平成二十六年に急逝された後、平成二十七年八月に大阪大学微生物病研究所より第八代教授として藤永由佳子が赴任し、平成二十八年四月より細菌学教室と改称し現在に至っています。当教室では、クロストリジウム属菌(中でもボツリヌス菌)の研究を中心に行っております。偶然ではありますが、前任の西田教授、中村教授、清水教授に続き、四代にわたるクロストリジウム研究室となっております。

##### 教育

##### 医学類

医学類二年生から三年生にかけての「細菌感染の講義・実習」を担当しております。平成二十七年度は特別講義として、北里大学の林俊治教授に「院内感染について」、富士見高原病院の唐澤忠宏先生(当教室の同門であ



り元本学保健学科教授)に「臨床から見た細菌学」、中村信一名誉教授に「細菌との共存」をご講義頂きました。三年生の基礎配属実習(二名)は、油谷雅広助教の指導で、「土壌中の微生物由来の抗菌物質の探索」をテーマに行いました。昨年ノーベル賞を受賞した大村智博士が、放線菌が産生する抗菌物質から抗寄生虫薬であるイベルメクチンの開発に繋がる発見したことになちなみ、同様の方法で、なるべくだれも思いつかないような場所を選んで土を採取してもらいました。残念ながら今回は強力な抗菌活性をもつ物質を産生する菌は得られませんでした。このような体験を通して、細菌学の面白さを知ってもらえたいと思います。学生さんの発表会では、入賞し第三位を頂きました。

##### 医学博士課程

教室の移動にともない大阪大学で医学研究科博士課程に在籍していた阿松 翔君は、今年一月より本学の特別研究学生として、引き続きボツリヌス毒素の腸管吸収機構の研究を続けています。

##### 研究紹介

細菌および細菌毒素は、宿主体内へ侵入して初めて病態を形成します。他方、宿主側では上皮バリアが防御の最前線です。我々はこれまで、細菌の病原因子と上皮バリアの相互作用が感染成立の鍵であると考え、ボツリヌス毒素を例に研究を進めて参りました。ボツリヌス菌が産生する本毒素は、致死率の高い食中毒事件やバイオテロなどで、社会的な注目度が高い毒素です。

ボツリヌス中毒発症機構の解明を進め、治療と応用のための医薬を社会に提供したいと考えております。そして将来は、様々な微生物の病原因子と上皮バリアの相互作用についての基礎応用研究を展開したいと考えております。

(1)ボツリヌス菌による病態発現機構の研究  
本菌の病原性発現機構、特に本毒素の体内侵入機構の解析を行なっています。本毒素は活性を保持しつつ腸管から侵入し末梢神経に作用します。我々は血清型A型の本毒素が特殊な上皮細胞であるM細胞より侵入することを見出しました。今後は、他の血清型も含めて本毒素の侵入経路を明らかにしたいと考えております。

(2)ボツリヌス症治療薬の開発  
国立感染症研究所や企業などとの連携により、有効で安全な治療用抗ボツリヌス神経毒素ヒト型モノクローナル抗体を作出しております。本シーズの臨床での実用化を目指し、研究を進展させていきたいと考えております。

(3)細菌由来物質を有用物質として応用する研究  
ボツリヌス菌が産生する無毒成分が有するEd-cadherin特異的機能阻害活性や、M細胞配向性を利用して、再生医療に用いる細胞培養技術に有用な物質やワクチンなどの経粘膜輸送体を創製する研究を行っています。

##### おわりに

末筆となりましたが、今後も教室員一同、医学教育・研究のために更なる研鑽を続けていく所存です。今後とも、十全同窓会の諸先生方のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(藤永 由佳子 記)

## 教室だより

腎病態統御学・腎臓内科学  
(旧臨床検査医学)

## 沿革

腎病態統御学・腎臓内科学(旧臨床検査医学)は、昭和六十一年に、松原藤継先生を初代教授として金沢大学医学部に新設、講座の歴史が始まりました。平成三年には、当時の橋本琢磨助教授が二代目教授に就任されました。平成十九年九月に、現在の和田隆志教授が三代目教授に就任されておられます。大学院の改組に伴い平成十三年、血液情報統御学研究分野、平成二十八年より、腎病態統御学・腎臓内科学と改称されました。平成二十八年度は、教室創設三十周年を迎えております。現在、和田隆志教授、酒井佳夫が准教授で所属しております。

## 教育

医学類教育では、三年生の臨床検査医学実習、腎・泌尿器・男性生殖器、感染症、五年生のBSL、六年生の診療参加型臨床実習を行い、臨床検査ならびに腎臓学の概論と詳細の教育を行っています。大学社会生活論の講義も担当しています。また、薬学類での臨床検査に関する教育、保健学類の卒業研究の指導を行っております。

## 大学院

現在、二名の修士課程学生が所属しています。博士課程に六名、うち附属病院検査部からは二名が博士課程に所属し、勤務後に研究活動に励んでいます。ベトナムからの留学生も加

わり賑やかに楽しく研究を進めています。

## 研究

臨床検査分野、腎臓学分野、消化器分野に関連した幅広い研究活動を行っています。

(1) 多臓器間ネットワークの機序解明と新規バイオマーカー開発

腎臓病ならびに腎臓病と関連する心臓病はじめ、多臓器障害機序の解明を行ってきました。慢性炎症、線維化の視点から、ケモカインに代表される液性因子側ならびに骨髄由来細胞からのアプローチを試みています。特にケモカイン発現をパネル化し、モニタリングすることにより、臨床的に疾患の活動性や病態を反映する臨床的バイオマーカーの開発につながる可能性があります。一方、新規に見いだした骨髄由来細胞が腎臓病と心臓病をはじめ多臓器間ネットワークに関与することも示し、研究を展開しています。さらに、新規バイオマーカーを最先端の技術を駆使して探索しています。

(2) 生活習慣病、食育と腎臓病

腎臓は生活環境を調節する重要な臓器です。生体内では未病から疾病の発症・進展に至るまで、腎臓と関連する様々な生体調節機構が働いていることが推測されます。実際、腎臓病の進展に伴い、脳心血管病変が生じ、生命予後に影響を与えます。そのため、糖尿病腎症に代表される生活習慣病、食育と関連し、腎臓病ならびに腎の調節機構の破綻から生じる全身疾患において、未病から発症・進展に至る機序解明とその制御機構を検討しています。ことに、腸内細菌叢に代表される細菌群、代謝産物とその輸送体の包括的な評価と全身との相互関連について検討しております。ことに、現在最大の腎

臓病である糖尿病性腎症に関して、平成二十一〜二十六年度の二期計六年間、厚生労働省研究班を担当し、糖尿病性腎症病期分類改訂、病理診断法確立に寄与しました。さらに、平成二十七年から日本医療研究開発機構の研究班を担当し、バイオマーカー開発などに邁進しています。

(3) 臨床に立脚した新規臨床検査腎臓病診断法の開発と臨床応用

腎コロボーマ症候群は、眼ならびに腎臓病を伴うまれな遺伝性疾患です。これまでに、眼科学教室と共同で簡便な遺伝子診断法を樹立し、確定診断を目指しています。さらに、膠原病を背景とした貧血を呈する症例から、貧血・造血との関連が示唆される新たな阻害因子の存在を示す知見を得ました。この新規阻害因子について、その生物活性の意義を検討するとともに、臨床応用を目指した測定系の開発と臨床応用に取り組んでいます。

(4) 細菌学・腸内細菌叢と腎疾患

薬剤耐性菌、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌をはじめ、臨床上問題となる細菌について、次世代シーケンサーによる解析を含めた研究を行っています。また、腸内細菌叢と腎疾患との関連についての研究にも取り組んでいます。最近では、細菌叢のメタゲノム解析やそ

の代謝産物としてのキララミノ酸解析を行い、細菌叢・宿主の全身病態の相互作用の解明を目指しております。

## 診療(臨床)

附属病院の検査部の運営に加え、附属病院の診療では、腎臓内科/リウマチ膠原病内科、および消化器内科に現スタッフは兼務しています。

## 附属病院検査部との業務

検査部とは週に一回、抄読会を実施し、臨床検査の最新の知見、各人の研究について発表の場を設けています。また、検査部運営の発展のため、検査部企画運営会議を一月に一度行い、検査部全体に関する運営状況、検査部各部署の業務状況を確認し、さらなる運営の発展企画を行っています。また、新年度歓迎会等

を行い、検査部との親睦を深めております。また、腎臓学に関連するミーティングにも検査部部員が積極的に参加し、お互いの向上を目指しています。

## おわりに

腎病態統御学・腎臓内科学講座(旧臨床検査医学講座)は、様々な臨床分野に横断的に関わる機会が多い魅力をもっております。附属病院検査部のスタッフとの協力により、臨床、研究、教育を、活発に行っており、今後さらに垣根を越えた協力をすすめていき、大学の発展に貢献していきたいと思っております。十全同窓会の皆様

の御指導、御鞭撻、どうぞよろしくお願い申し上げます。



【支部だより】

三重支部

平成二十七年全同窓会三重支部総会は、平成二十八年二月十四日(日)に三重県津市の料亭「はま作」で行われました。本年度総会には十一人の会員が出席しました(昨年十二名)。三重支部では、支部長原田資先生(昭和四十六年卒業)のもと、今回の総会も、和やかに進行していきました。(近藤峰生先生(平成三年卒業)、伊藤健太郎先生(平成二十一年卒業)、野口孝先生(特別会員)は、ご用事のため欠席となりましたが、来年はご参加頂ける事を願っています。現在の三重支部の会員数は二十一名です。)

会計報告の後、水本龍二先生(昭和三十年卒業)より、八甲田山の雪中行軍のお話や、香林坊の謂れ、その後、南下軍の歌、北帰行と続き、貴重な四高時代のお話をうかがう事が出来て、参加された先生がた皆が感動していました。毎年、題材を考え、ご参加頂ける水本先生にとっても感謝しております。また、金沢大学の医師国家試験の合格率や卒業後の進路のお話をうかがいました。現在の金沢大学の近況なども聞け、大変興味深かったです。その後は、いつものように、懇談会に移りました。懇談会では生駒一徹先生(昭和二十一年卒業)が、歌を披露されました。御年九十四歳になられても各方面で活躍されていることにも感銘を受けました。そして、懇談会も和やかな雰囲気うちに終わり、閉会となりました。また、来年の同窓会も楽しみにしています。今回参加できなかった先生がたも、是非、ご出席をお待ちしています。

写真

(黒川 義博 記)

後列左から…大石晃嗣(昭和六十三年卒業)、東谷光庸(平成十三年卒業)、黒川義博(平成二十一年卒業)、伊藤敏秋(昭和五十二年卒業)、中瀬玲子(昭和六十二年卒業)、春木祐司(平成十七年卒業)  
前列左から…森一満(昭和五十一年卒業)、水本龍二(昭和三十年卒業)、原田資(昭和四十六年卒業)(支部長)、生駒一徹(昭和二十一年卒業)、祖父江直久(昭和五十一年卒業)(敬称略)



富山支部

この度富山県全同窓会総会を、中村信一金沢大学全同窓会会長を迎えて開催したので報告します。

本会は昭和五十年八月九日に設立された活動をしていたが、昭和六十三年十一月の総会を最後に、休会に近い状態が続いていました。この間に会長の広瀬友二先生が逝去され、後任の会長も決まっていまませんでした。学部創立百五十周年を迎えるに先立って、再開を同窓会本部から勧められましたが、当時富山県医師会執行部の大半を本学卒業生が占めていました、その中で一大学の同窓会を開くことには医師会の運営上影響があると考えられ見送られていました。同時に会長が不在となりましたが、副会長も他界されていまして、引き継ぐべき人がなくなっていました。

ごく最近に富山県の医師会会員に大きな変化が生じてきました、本学出身者は過半数を大きく割る状態に至りました。県医師会執行部の役員の四分の一が本学出身という情勢になりました。その中で本会の再開をという声が出てきました。再開を見送った際に県医師会会長であった私に世話するようにとの話が出てきました。特に故正橋剛二先生が強く望まれ、働きかけをいろいろとされていきました。その影響もあり、再開の時期ではないかと話し合う方も出てきて、平成二十七年五月に有志の方が集まって頂き、今後のことを話し合う場が出来ました。その方々を世話人として活動を始めました。

先ずその時点で名簿上在籍されている

るすべての方に継続に対しての意向を聞きました。二百三十八名に連絡を取り、百五十四名からの回答を得、八十名の方の継続の意思を確認し、会を解散する根拠がないと判断し、登録されていない本学卒業生、大学院修了の方等本学の関係者の方々に入会の案内をしました。三百二十二名中九十三名の方より入会の申し出を受けました。百七十三名で会を再開にすることになりました。



本部の支援もいただき、平成二十八年二月二十日に富山県十全同窓会総会を開くに至りました。この席で改めて役員が決まり、会則の改正案が決まり、今後の継続的な活動方針が示されました。引き続き中村信一会長より「医学部の近況」と題して講演して頂きました。新しい学部の状態を知らないものも多く、出席者一同感銘を受けていました。引き続き懇親会を中村会長にも加わって頂き執り行いました。楽しい会になり次回も楽しみの声も聞かれ散会しました。

今後はこれまでのように休会することが無いように心して会の運営を図って行きたいと考えています。本部のご支援を期待しています。

最後になりましたが、本会の再開にあたり富山県医師会の十全同窓会前担当の高野百合子さんそして何よりも今回の開催までの全面的な世話をしてくださった十全同窓会現担当大作隆一氏に感謝しています。

当日決められました役員は次の通りです。

(福田 孜 記)

富山県十全同窓会役員  
 会長 福田孜、副会長 泉良平、幹事  
 小関支郎、南里泰弘、藤田一、監事 高柳尹立、藤井久丈、顧問 前田昭治、藤田嘉文、倉知正佳 以上です。

## ボストン支部

このたび、森下英理子教授（金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学類病態検査学）がサバティカル制度にてボストン大学に一年間の予定で赴任されたのを機に、同じく金沢大学よりボストンに留学中



の野村氏、中河氏とともにチャイナタウンにあるChina Pearlで飲茶を共にした。

森下教授は、留学先のボストン大学の研究者と共に、未だ有効な治療法のない溶血性尿毒症候群 (Hemolytic Uremic Syndrome) に対する新規治療薬の開発に携わっておられる。野村氏は平成二十六年夏よりハーバード大学医学部附属マサチューセッツ総合病院ヒト遺伝学研究所に留学し、次世代シーケンサーを用いた心臓突然死疾患と遺伝子との関係についての研究を、中河氏は平成二十七年夏よりハーバード大学医学部附属ダナファーマー癌研究所に留学し、癌に対する免疫機能についての研究を行っている。臨床医のわたくし広瀬は、ボストンにて主に患

者の診療に従事し、ハーバード大学附属マサチューセッツ総合病院眼科での網膜の手術、およびスケペンス眼研究所にて主に日本からの眼科医・研究者とともに実験を続けてかれこれ四十年以上になる。

今回の会合はそれぞれの家族全員が集まり、森下先生の歓迎会を飲茶で盛大に行なった。ボストンで人気のあるChina Pearlでの飲茶は、中国人女性の給仕達がカートに様々な中国料理をのせて客のテーブルに運んでくる。そして客はその中から希望する料理を選ぶ仕組みである。一皿の食べ物の量は少な目に盛り付けられており、次から次へと給仕達が持ってくる料理を好きなだけ楽しむことができる。この中華料理は東南アジア独特の臭みが全くなく、我々日本人でもなじみやすい味である。飲茶の良い点は自分で好きな物を直接見て注文できる事と、できたての湯気ほやほやの食事にありつけることである。ほとんどの中国人の給仕が英語を理解しない不便さはある。無論日本語もダメ。しかし、現物が運ばれてくるので、欲しいものを指で指して注文さえすれば良い。我々はこれを幸いにして、テーブルいっぱい飲茶を囲みながら、久しぶりに時間を忘れて金沢弁で語り合い、友好を深めた。

(広瀬 竜夫 記)

## クラス会 三八会

卒業以来毎年飽きることなく続いております我が愛すべき三八会同窓会、平成二十七年度は竹越CEOのもと、初めて



高岡の地で行われました。現在の高岡居住者は鍛冶君とわたくし瀬尾の二人しかいませんので否応なしに世話をさせていただくことになりました。

この文は、諸般の事情により出席できなかった諸君に当日の雰囲気をお伝えできればと思っております。

開催日は先に「案内状」で連絡した通り、十一月十四日に高岡ニューオータニホテルに

ご参集頂き開宴いたしました。参加者は男性二十三名、女性三名、同伴者九名でした。この一年間の物故者関野壮君、清水英雄君、白井千博君の御霊安からんことを祈って黙禱の後宴会にはいりました。

もう今では当然のテーブル席で、痛む膝を庇わなくてすみます。上座、下座の区別もほとんどありません。半数は背中しか見えないハンディはありますが、徳利を持ってご挨拶、それぞれ久闊を叙しておりました。途中郷土民謡の「こきりこ節」の唄と踊りを鑑賞しながら宴は更けてゆきました。その後、十四階の展望ラウンジで行われた二次会でお一人ばかり女性陣のお世話になっておりましたが、まだ元氣な奴がいるなあと、むしろ微笑ましく感じました。でも、彼はまた来年も同じことをやるのでしょうか。

翌日、観光組は世界遺産白川郷観光です。車中では福田君が名ガイド役をつとめ、また現地の案内人が素人っぽく親しみがもって楽しいひと時でした。富山駅で再会を約し散会しました。ゴルフ参加者は年々少なくなり今年にはコンペは成立せず。同好の志、中西、蓮村、渡辺、土田君が火花を散らしたやに聞きました。土田君はエイジシュート74を成し遂げた直後でありお祝いを申し上げます。来年は小松地区にお願ひすることになっています。

書記・会計は中西君から亀田君に交替しました。  
世話人・鍛冶友昭、亀田健一、竹越襄、中西功夫、福田孜、瀬尾迪夫

(瀬尾 迪夫 記)

### 昭和三十九年同窓会

卒業後五十一年目の同窓会が平成二十八年二月十三日福井県のあわら温泉にて開催されました。例年、春か秋ごろの天候のよい時期を選んで開催されていましたが、今年には福井名物の「かに会席」を堪能しようとのことで二月開催となりました。降雪による交通渋滞等の心配をしていましたが、一日を通し小雨ないし曇り空の天候で総勢十五名の参加者全員が定刻どおり参集しました。全員の記念撮影の後、開宴となりました。まず、この一年間で亡くなられた級友に対し黙禱をささげました。

その後、久しぶりの参加となった岩泉君の発声による乾杯の後、和氣あいあい

と会員相互の健康・近況等を歓談し、時に黙々と「かに料理」を楽しみながら宴会を一次終了し、二次会へ移り夜半まで歓談を楽しみ、次回開催まで全員の健康を願ひながら閉会となりました。

参加者：岩泉九二夫、岩佐嘉郎、白井溢、加納勝利、土屋良武、野垣俊幸、藤村和昌、堀川利彦夫妻、松田尚武、宮城徹三郎、山本達、米倉幸人、渡辺国重夫妻

(渡辺 国重 記)

### 昭和六十年卒業クラス会

平成二十八年二月二十七日(土曜日)にANAクラウンプラザホテル金沢にて上記同窓会が開催されましたので報告させていただきます。

今回の同級会は卒業後三〇年を記念して企画されたいわば第二回の同窓会となります。ちなみに、第一回は平成十八年一月七日に卒業後二〇年を記念して行われました。

参加者は六十四名で、五〇音順に氏名を並べると(敬称略)、足立巖、新井芳行、荒川文敬、糸氏亨、猪飼純市、稲沖真、稲寺秀邦、岩佐和典、浦出雅昭、大澤良郎、大場洋、大原康壽、尾崎茂、角田尚幸、加藤裕之、角谷直孝、菊込正人、菊一雅弘、黒田安計、郷克巳、小林健、小松和人、斉藤和則、齋藤正典、斉藤元泰、斉藤友護、堺堀洋治、島隆雄、清水俊夫、下竹孝志、秀毛範至、白鳥一明、高橋敬一、竹田洋介、竹村博文、伊達正恒、一林哲弥、多賀浩美、寺崎敏郎、寺田一志、道伝研司、内藤毅郎、五嶋摩理、中村裕之、西耕一、西郡聡、西野暢、畠山収一、濱崎裕、伴登宏行、谷口知子、藤井寿美枝、藤田

一、堀礼子、前田義樹、真智俊彦、水嶋潔、宮本元、本谷研司、山形要人、山下陽子、横山茂、横山博俊、吉川弘明となります(敬称略)。残念ながら土井建朗は体調不良で参加できませんでした。

午後六時四十五分から記念撮影を行い、午後七時から宴会が始まりました。同窓会進行は小林健が担当しました。まず、幹事を代表して西耕一が開会の挨拶を行いました。続いて、下竹孝志が乾杯の挨拶を行い、待ちに待った宴会が始まりました。大学時代の同級生とはありがたいもので、卒業後三〇年間全く顔を合わした事もなく、専門分野に全く関連がなく、立場が全く異なっていてとしても、すぐに昔に戻って打ち解ける事ができます。参加者は学生時代に戻ったようで、若者のように盛り上がりつつありました。

三〇分ほど経過し、少し空腹が満たされてから、伴登宏行の座長の下、地元で大学教授になられた四名の同級生から講演を頂戴しました。演題名と演者は以下の如くです。講演一「子どもの健康と環境を考える」富山大学医学部公衆衛生学講座教授稲寺秀邦、講演二「低侵襲心臓大血管手術を目指して」金沢大学医薬保健研究域医学系先進総合外科学教授竹村博文、講演三「金沢大学の新しい大学院、先進予防医学研究科」金沢大学医薬保健研究域医学系環境生態医学・公衆衛生学教授/金沢大学大学院先進予防医学研究科長(次期)中村裕之、講演四「総合大学で実施するプラクティカルな食育」金沢大学保健管理センター教授 吉川弘明。各演者は酔っ払い向けの講演ということもあり、学生時代の写真などを織り交ぜながら、難しい内容を囁んで含めるよう





に解りやすくお話をされました。「近況報告」では、様々な立場で皆さんが元気で活躍していらつしやることが伝わりました。また、週末にはゴルフ、マラソン、

テニス、音楽などでしつかり生活を楽しんでいる姿もうかがえました。お孫さんが生まれた先生も何人かおられました。予定した二時間はあつという間に過ぎ、藤井寿美枝が中締めを行いました。

ホテルの十九階に用意された二次会場には、盛り上がりつつあった一次会の余勢を駆って、五十一名もの参加者が集まりました。このような多くの皆さんに二次会にまでご参加いただけるなど当初は予想もしておらず、幹事一同とてもうれしく思いました。午後十一時過ぎの二次会終了時に皆で再会を誓った後、三々五々別れましたが、中には午前三時過ぎまで飲んだ猛者もいたようです。

一次会中に参加者に記載していただいた寄せ書き「同窓生に一言」では、「健康に気をつけて、元気で楽しく長生きしましょう／頑張りましょう」といったメッセージを多くいただきました。また、「金大に入って幸せだったと思いました」というメッセージもいただきました。参加者一同同じ気持ちであったと思います。同窓会終了後、参加者から幹事に届いたメールには、「三〇年ぶりに同窓生たちに感動的な再会をはたし、本当に楽しかったです。ありがとうございます。」「堅実ですばらしい同級生のみなさまに助けられて、今があることを改めてしみじみ感謝しています。」「解剖実習仲間全員と三〇年ぶりに会うことが出来、とてもうれしかったです。」といった内容のものがあり、幹事一同、全ての苦勞が報われた気がしました。

ちなみに、この同窓会の幹事は石川県立中央病院に勤務している同級生の小林健、下竹孝志、西耕一、伴登宏行、藤井寿美

## 第百十回

### 医師国家試験結果

第百十回医師国家試験結果が厚生労働省より平成二十八年三月十八日に発表され、本学の新卒者は九五・〇%の合格率を達成しました(全国八十医学部・医科大学中四十位)。全国平均は、九四・三%でした。金沢大学としては、過去十年間で六番目の成績でした。昨年度は、

枝、松原隆夫の六名が担当しました。また、横山博俊が会場カメラマンを務めました。(西耕一記)

金沢大学は他大学五校とともに新卒者一〇〇%合格を達成しました(九十五名合格)ので、本年は合格率で見ると昨年度を下回る結果となりました。ちなみに、本年は、順天堂大学、東京慈恵会医科大学、和歌山県立医科大学、近畿大学の四校が一〇〇%合格を達成しました。昨年金沢大学とともに一〇〇%合格を達成した他の五校はいずれも、本年は合格率が低下しました。また、既卒者は四名が受験し、三名が合格しました。

※ ( ) 内は第109回結果

#### 第110回医師国家試験結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
平成28年3月 卒業生	120名 (95名)	114名 (95名)	6名	95.0% (100.0%)	94.3% (94.5%)
平成27年3月 以前の卒業生	4名 (9名)	3名 (6名)	1名	75.0% (66.7%)	60.1% (57.0%)
合計	124名 (104名)	117名 (101名)	7名	94.4% (97.1%)	91.5% (91.2%)

国家試験成績の評価で注目されるもう一つのポイントは、合格者の実数です。本年の金沢大学新卒者の合格者実数は一一四名であり、これは全国で十位に相当します。昨年は九十五名の合格者です。昨年と本年の二年間の合計では新卒者九七・二%の合格率となり、全国八十校中の上位四分の一に入っているとされます。

近年、留年学生が増加傾向にあります。学生支援委員長を中心として成績不振学生へのきめの細かい対応を強化し、また医学類教員による専門教育の早期導入により入学生への医学への関心を高め向学心を養う、といった取り組みを始めております。これらの取り組みが実を結び、全員が六年間で卒業し、かつ全員が国家試験に合格する、の成果を得ることを期待しています。

(多久和陽記)

平成二十八年三月卒業者進路

赤崎 恭太	金沢医療センター	久保 超人	富山県立中央病院	玉木 理仁	聖路加国際病院	向田 幸世	東京医科歯科大学医学部附
荒井千香子	越谷市立病院	黒田 紘典	厚生連高岡病院	洞庭 葉子	日本鋼管病院	武藤 篤	富山県立中央病院
石黒 賢志	国立研究開発法人国立国際医療研究センター病院	桑原 優	中部ろうさい病院	豊田 潮帆	東京医科歯科大学医学部附属病院	村上 慎吾	神戸大学医学部附属病院
石島 有華	金沢大学附属病院	小市 宏子	川口総合病院	豊田 善真	金沢大学附属病院	百瀬 直也	国立研究開発法人国立国際医療研究センター病院
石堂 博敬	湘南鎌倉総合病院	児島 直樹	国立研究開発法人国立国際医療研究センター病院	鳥居 祐希	石川県立中央病院	森 誠	富山赤十字病院
伊藤 麻優	海南病院	後藤 宏樹	虎の門病院	土定 靖典	金沢大学附属病院	柳 昌宏	金沢大学附属病院
稲島 有規	千葉市立青葉病院	小西 正紘	福井県立病院	中尾 一貴	トヨタ記念病院	山上 美紀子	富山県立中央病院
犬飼 高平	名古屋第二赤十字病院	小林 雅明	社会医療法人財団慈泉会相澤病院	中澤 和樹	金沢大学附属病院	山口 彩華	富山県立中央病院
井上 葵子	福井県立病院	酒井 博生	豊田厚生病院	長谷 賢	金沢大学附属病院	山崎 雅弘	金沢大学附属病院
岩本 隼輔	公立能登総合病院	坂井 勇太	金沢大学附属病院	中原光玖仁	金沢大学附属病院	山田 梓	豊島病院
上野 和音	公立能登総合病院	坂井 友哉	石川県立中央病院	中村 翔平	都立駒込病院	山本 晃之	日本医科大学千葉北総病院
上原 征洋	厚生連高岡病院	坂本 直也	東京大学医学部附属病院	西本 優弥	名古屋医療センター	山本 侃暉	富山県立中央病院
請田 翔子	京都市立病院	眞田 創	石川県立中央病院	貫井 友貴	虎の門病院	山本真千子	Texas Tech University El Paso 小児科レジデント
姥浦 一太	金沢大学附属病院	佐原 翠	自治医科大学附属さいたま医療センター	野口 昌寛	福井県済生会病院	横山 拓也	福井県立病院
江口 裕也	市立砺波総合病院	塩谷 昌大	医療法人財団康生会武田病院	野島 晃己	名古屋第二赤十字病院	吉尾 隆利	金沢大学附属病院
餌取 慶史	国保旭中央病院	島川 祐典	宇治徳洲会病院	長谷川雄基	一般財団法人津山慈風会津山中央病院	吉識 賢志	金沢大学附属病院
大島 由	JCHO金沢病院	清水 奨太	金沢大学附属病院	華房 宏成	山中央病院	吉倉 昌平	金沢大学附属病院
公受 裕樹	千葉西総合病院	下川 寛右	金沢大学附属病院	林 大輝	金沢大学附属病院	脇 智彦	同愛記念病院
小川 宜彦	石川県立中央病院	下島 康太	京都市立病院	東 奈美	水戸協同病院		
奥田 丈士	金沢市立病院	新庄 祐介	富山県立中央病院	樋口 陽	東京大学医学部附属病院		
街道 達哉	刈谷豊田総合病院	杉山 紘	金沢大学附属病院	藤井 啓太	横浜栄共済病院		
柿本 知勇	日野市立病院	鈴木 勇多	富山県立中央病院	伏田奈津美	石川県立中央病院		
加治 貴彰	金沢大学附属病院	關 裕介	公立昭和病院	藤原 優太	金沢大学附属病院		
片野 薫	金沢大学附属病院	泉水 康洋	諏訪赤十字病院	本田 麻依子	富山県立中央病院		
金谷 麻央	富山県立中央病院	高嶋 祐大	金沢医療センター	本田 雅希	長野中央病院		
金山 智之	金沢大学附属病院	竹内 千尋	岡崎市民病院	前田振一郎	大津赤十字病院		
蒲田 勇介	大阪府済生会吹田病院	武田宗一郎	済生会横浜市南部病院	松田 織音	金沢大学附属病院		
神末 真由	社会医療法人愛仁会高槻病院	武田 優	市立島田市民病院	松田 薫	金沢医療センター		
川瀬翔太郎	富山県立中央病院	田島 栄治	富山県立中央病院	溝上 晴恵	黒部市民病院		
河瀬 信	京都第一赤十字病院	田中 彰子	富山県立中央病院	南川 靖太	金沢大学附属病院		
鑑高 彩夏	金沢大学附属病院	田中 和	神戸労災病院	南川 竜輔	黒部市民病院		
葛巻 哲	JCHO北海道病院	谷下 紗季		蓑毛 翔吾	土浦協同病院		



(五〇音順)

# JUZEN FORUM HISTORICUM

## 十全歴史ひろば【4】

### 金沢医科大学一九五二年卒業・「而立会」

#### ―追憶の中の人々―

#### 竹田 亮祐

昭和二十七年卒業のクラス会「而立会」誕生の経緯については「卒後五十周年記念文集」の末尾に付記されたことがある。

而立はいうまでもなく論語為政の三十而立からの引用である。この会名は卒業時に付けられたわけではなく一九六〇年代の初頭、当時の教授を囲む会として発足したと記憶している。古い十全記念会館での雰囲気をおぼろげに思い起こすと、まづゲストとして最初にお招きしたのはたしか当時の医学部長・谷友次教授であった。席上、先生は新任の卜部美代志教授への熱い期待を述べられた。何回目のゲストだったか新進の本庄一夫教授は、ラッキーなご自身の過去について

触れ宇奈月の国立療養所時代、暇にまかせ外科の手術手法に関する本をよく読んでというエピソードを話された。このよな会は何回続いたのであろうか？記録が遺されていないのかにも残念である。ともかく講義から受ける教授のイメージといささか違う、真ツ当なお人柄が伝わるので私たち新参医の心に各教授の個性が伝ったように思う。

そのうちだれが提案したのか、会は小グループの気のはらない勉強の集いに発展していった。そして一九六六年の三月

以来セミナーの名で各自任意の話題を順番に提供し、お互いに日進の医学を習得しようという趣旨の会が始められ暫くの間続いた。ここで二十周年にあたり「而立会の歩み」を草した梅崎伸兄の文を再掲し、かれの記憶に残る会の命名に纏わる逸話を添えておきたい。

「私達のクラスは学生時代から何事につけまとまりがよく、よく学びよく遊んだと思う。卒業後も金沢に残った人たちを中心に「クラス会を存続しよう」との声が高くなり、間もなく大矢昭夫兄の命名になる而立会―別名AT-Gruppeが発足して月例セミナーが始まった。当初は母校の教授が助教授クラスを講師としてお願いしていたがやがて十数年も過ぎると次第に会員各自の研究内容や臨床体験や医学論、その他一般にわたる情報交換の場として根気よく続けられ、プレゼンテーションの概要は而立会通信によって全会員に通報されて来た」。

会の名称を決める際、それぞれに我こそはと思う個人的な名称がいくつ候補に上ったが、最後に「而立会」と「垢出美会」の二つが残った。決選投票でO兄の提案した而立会と決まったと覚えている。そして幾星霜が経ち去りO兄もN兄も疾うに逝いた。

いま遺されたセミナーのプログラムを回顧してみると、毎月のテーマ案内と前回のトピック(抄録)が几帳面にガリ版に纏められている。

幹事諸兄、特に亡き林敏兄のご苦労の賜物である。当時にしてはそう類をみない催しで今日では日常の行事となっているコンファランスやセミナーの魁と自負してもよからう。

#### 回顧

而立会では卒後十五年を経て医学部になにか記念すべきものを寄贈しようとの発議があり、山口兄が時の医学部長・井上剛教授に申し出たところ、医学部基礎棟への通用門に「バラのアーチ」を設置することを希望された。現在、「荊棘の門」として存続している(バラは二代目のヒマラヤン・ムンクス)。

而立会二十周年記念会は(昭和四十七三月十九日)白雲楼において泉大谷―松田―倉知―石川―平松―石崎―高瀬―本陣―豊田教授をお招きし賑々しく催された。

そして十年、而立会三十周年にあたり本陣良平先生は七言絶句五首を贈って下さった。うち二首をあげる。

#### 「粟津温泉佳会贈而立会諸公」

院落春宵澹澹風 院落の春宵 澹澹たる風  
暈離狂飲予誰同 むかえよんぐ 狂飲 誰とにせん  
閑談逸興長斯夕 閑談 逸興 斯の夕を長うすれば  
踏影詩成半醉中 影を踏んで詩は成る半醉の中

上平声 一東韻  
泉煙霧霽入朝暉 泉煙 霧霽 朝暉にいに

無那天涯北雁飛 いかんとするなし 天涯 北雁の飛ぶを  
一夜佳期從是別 一夜の佳期 是より別る  
断腸春色幾時歸 断腸の春色 幾時か帰る  
上平声 五微韻

又十年、四十周年記念会は平成四年六月二十日、大矢兄のお世話で「彦根プリンスホテル」で行われた。

そして卒後半世紀、而立会五十周年(平成十四年)に太田兄は、

春花又散只忽忽 春花 又散って 只 忽忽  
異国多年一夢中 異国に 多年 一夢の中  
宿昔志今何処逝 宿昔の志 今 何処に逝きし  
蹉跎落魄七三翁 蹉跎たり 落魄 七三の翁  
上平声 一東韻

と懐郷の思いを寄せ、小生は

東山十月上高樓 東山 十月 高樓に上り  
欲祝修医五十秋 祝わんとす 医を修めて五十の秋を  
老大研鑽殘夢少 老大 研鑽するも 殘夢少なし  
換鶴共聽妓歌謳 鶴を換え 共に聴く妓の歌謳を  
下平声 十一尤韻

と歎じた。

そして又次の十年が東の間に過ぎ去った。入学時、八十四名を数えた級友も今や超高齢に達し、金沢大学医学部創立百五十年周年祝賀の日、卒後六十周年(七月七日二〇一二)をもって總會を閉じ記念に小刷子「而立会六十周年短信集」を遺した。

(本稿は、而立会通信の書記役を果たした亡き林敏、瀬川安雄兄、ならびに山口成良兄の熱意ある記録を参照にして記した。)

而立会ゼミナール

年	日 時	名前	テーマ	
1966年	3月20日	織田・瀬川	「血清肝炎」	
	4月17日 (倉重宅にて)	蒔・久住	「高血圧をきる」	
	5月15日	大橋・大溝	「腹部手術後の諸問題」 「Dumping syndrome」 高田君帰国歓迎会	
	6月19日	飯森・山口	「頭部外傷—後遺症」	
	7月24日	高田・道下	「肝硬変症とアルコール」	
	8月21日 (於砺波市中野山田屋)	仲井	「症例提示」	
	9月25日	倉重・的場	「膀胱結石」、「糖尿病の自己体験」	
	10月10日	長林	「心筋梗塞」	
	11月13日 (於松任 犀与亭)	石田	「超音波診断法の経験」 竹田帰国歓迎会	
	1967年	1月9日 (於太郎)	須山	「ヘマトポルフィリン」 新年会
		3月19日	杉山	「高血圧と心電図」
4月30日		仲井	「肥満」	
7月23日		正印	「溶連菌とがん」	
9月24日		瀬川・倉重	「新薬の使用経験」	
10月22日		廣根	「Behcet病」 廣根君帰国歓迎会 「アラバマ生活あれこれ」	
11月19日		宝達	「小児の発疹性疾患の二、三について」	
1968年		1月28日 (於太郎)	山本 (純)	「ガストロカメラの経験と症例検討」 「Limy bileに一例」 新年会
		2月25日	西田	「睾丸性女性化症例、その他」
		4月28日	山本 (巖)	「血尿について」
	5月26日	島田	「痙攣発作をもって初発した急性髄膜脳炎」	
	6月23日	梅崎	「小児のいわゆる自家中毒について」	
	7月21日	正印・杉山	「副腎ステロイドの使用をめぐって」	
	8月25日	織田・瀬川	「肺疾患の内科と外科」	
	9月29日 (於金城楼)	浅野・金田	「内科側、外科側からみた虫垂炎の診断と治療」 正印君教授昇任祝賀会	
	11月2日 (泊— 於小川温泉元湯)	寺崎	「胃がん集団検診」	
	12月1日	村上	「胃潰瘍の体験的症候と治療」	
	1969年	1月12日 (於太郎)		新年会
2月16日		蒔	「インフルエンザについて」	
3月16日		片口	「眼科領域における診療あれこれ」	
5月18日		廣根	「皮膚がんについて」	
6月22日		西田	「絨毛性腫瘍の肺転移」	
8月31日 (於百楽)				
10月18日		根岸	「網膜内の情報処理について」	
12月14日		林	「重症患者の心理指導について」	
1970年		1月31日 (於九龍)		新年会
		3月20日 (於金城楼)		根岸君、西田君歓迎—歓送会
	3月28日	蒔	「大気公害」	
	5月16日	竹田	「アジア太平洋内分泌学会とオークランドの印象」	
	9月12日	西田	「更年期障害」	
	11月21日	道下	「ソビエトを主として欧米の医療の現状」	
	1972年	6月25日	北国新聞社 荒谷余十勝主筆	「第三者よりみた医師について」
11月26日		竹田	「薬品の副作用について」	
		高田	「アルコール中毒」	
1973年	5月21日	山口	「トランキライザーの分類・副作用」	

謝恩会

三月二十二日、春の陽気を感じ桜の蕾が膨らむ中、金沢ニューグランドホテルで「平成二十七年謝恩会」が執り行われました。昨年の倍に当たる三十八名の先生方にご出席いただき、盛会となりました。

例年、十全講堂において写真撮影が行われていましたが、今年度は十全講堂が工事のために、謝恩会の冒頭でニューグ

ランドホテルにて行いました。写真撮影後、まず卒業生を代表して小川宜彦君から挨拶、つづいて医学類長の多久和陽先生から祝いのお言葉を頂き、医学系研究科長の金子周一先生のご発声による乾杯の後、祝宴に移りました。

会では、卒業生によるピアノ、ヴァイオリン演奏やビンゴ大会といったレクリエーションが会をさらに盛り上げ、会話も弾み、多くの笑顔が見られました。最後に、医薬保健研究域・学域長の井関尚一先生、金沢大学附属病院長の並木幹夫

先生からお言葉を頂き、盛会のうちに閉会となりました。

高齢化の進行に伴う医療費の増大や、疾病構造の変化など日本の医療が大きく変化している時代に、私たち平成二十七年卒業生は医師としての第一歩を踏み出すこととなりました。これからの人生では、予測しない困難や大きな課題に遭遇すると思いますが、金沢大学医学部で過ごした六年間で培った知識、教養、経験、友人との絆を糧に、成長していきたく思います。また、全国各地でご活躍

なさっている金沢大学医学部十全同窓会の先輩方とのつながりを大切に、今後の医師、医学研究者としての道を歩んでいきたいと思っております。最後になりましたが、ご多忙の中で謝恩会にご参加いただいた先生方、六年間ご指導くださいました先生方、様々な面で支えてくださった学校関係者の方々に、改めて感謝し、深くお礼申し上げます。今度も、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひします。

(平成二十七年謝恩会実行委員長

武田 優 記)

十全昔話

五十二回金沢大学医学部三十五年卒業同窓会(さんご会)を中心に毎年続く同窓会の過去・現在や未来を想つ。

横田 徳久(昭和三十五年卒業)

昨年、平成二十六年十月十二日(日)、東京のパレスホテル東京で、五十二回目同窓会が開催されました。午後五時頃には宴会場前のロビーには大勢の方々(單身や夫婦同伴)が参加され、再会を喜びあいました。夫婦同伴参加は比較的早い時期から行われ、奥様方は担当幹事の開催地に旅行する気分で、参加を楽しんでみえる様です。が今年から幹事の負担軽減のため、宴会の翌日のゴルフ(以前から)や観光(今年からは取り止めになりました)。恒例の全員写真撮影を終え、宴会場では、総勢三十一名が円テーブルの所定の席に着き、A先生のユーモラスな司会で進められ、まず昨年の富山同窓会以来亡くなられた三人の先生(K・M・U)の黙祷が始まりました。毎年二、三人の方が亡くなられ、既に総勢八十四名中三分の一が他界されてみえます。その中からお一人のU先生は昨年迄会計幹事で、弔慰金のお世話して下さいました。生前「これから先、どうなるかわかりませんが、私が生きていく限り、この職務を全う致します。」と言われていた事を思い出します。改めて我々は待たなしの年齢にきている事を実感しました。今S先生がすぐU先生の後を引き継いでやっていただける。頭が下がる思いです。これ迄の同窓会を振り返ると、最初は昭和三十七年(卒業三十五年)で、当時の幹事は同窓生所属の医局単位で、

最初は皮膚・泌尿科の医局が受け持ち、以後当分の間他の医局と、開催地は金沢地区で続けられ、昭和四十六年の氷見市での開催から、五年周期で、一回は地元金沢、後の二回は富山と福井、後の二回は全国に居る同窓会の所在地で、それぞれの開催地の方が幹事になり、宴会や翌日のゴルフや観光が行われて来ました。観光地もゆきつきし、参加者全員が希望する場所、例えば奈良のお寺巡りや四国松山からしまなみ海道等訪ねた事もありました。こうした多くの方々のご努力も、同窓生の高齢化に勝てず、特に幹事の負担を軽くするため、今年から宴会のみと

なり、幹事も出来る方がなるといふ事になりました。又参加者もこの所、減少傾向ですが、幸い以前から夫婦同伴組のお陰で、参加者(三十人前後)、それ以上にご主人の幹事の折衷様の全面的支援がありました。それもご主人が亡くなれば当然奥様も不参加となります。今後の同窓会の在り方が問われ、S先生は「今後の同窓会の在り方について、皆様のご意見を参考に来年の金沢での同窓会迄に案を作成します」と。会場ではコース料理も出つくし、各テーブル間の話しあいも一段落した処で、Y先生の近況報告を皮切りに、N先生の子宮頸癌の話やO先生

の整形外科の治療法を巡り、各先生から質問や追加意見が出て、一気に会が盛り上がり、さすが今でも現役の方々の集まりと感じました。同窓生も年齢を重ね、その間社会や家族状況の変化、同窓生の様子も変わって来ました。若い頃は見栄や外聞を気にし、競争心も出て、あまりこの頃の同窓会は好きになれませんでした。ここ数年の同窓会は大好きです。お互いに思いやり、円くなり、まだ八十才前後でも現役で豊饒とされ、元気に人生を楽しんでみえます。私も今、これから長くこの同窓会が続く、皆様と再会する事を心から願っています。

さんご会開催記録 平成27年9月26日

回数	開催期日	開催地	当番幹事	記事
第1回	昭和37年12月8日	金沢市「味苑」	皮・泌(稲葉)	
第2回	昭和38年12月7日	金沢市「ト一」	整外(布谷)	
第3回	昭和40年2月19日	金沢市「さいとう」	一内(半田)	記録なし
第4回	昭和41年2月19日	金沢市「太郎」	一外(渡辺)	記録・記念写真なし
第5回	昭和42年2月25日	金沢市「金城楼」	二内	
第6回	昭和43年2月24日	粟津温泉「辻のや」	二外	
第7回	昭和44年2月22日	金沢市「大清楼」	放・児	記念写真なし
第8回	昭和45年2月28日	金沢市「都ホテル」	脳外・精	「さんご会」と命名
第9回	昭和46年2月22日	氷見市「永芳閣」	富山県	
第10回	昭和47年3月18日	金沢市「杉の井」	金沢市	記念写真なし
第11回	昭和48年2月17日	芦原温泉「有楽荘」	福井県	
第12回	昭和49年2月23日	高岡市「高陵ホテル」	富山県	
第13回	昭和50年8月23日	小松市安宅「長沖」	金沢市	15周年記念
第14回	昭和51年9月25日	蒲郡市「青柳」	豊橋市	
第15回	昭和52年9月17日	芦原温泉「有楽荘」	福井県	
第16回	昭和53年9月30日	富山県「立山国際ホテル」	富山県	
第17回	昭和54年10月6日	岐阜市「長良川ホテル」	岐阜県	
第18回	昭和55年9月14日	金沢市「北間楼」	金沢市	20周年記念
第19回	昭和56年9月12日	芦原温泉「仁泉」	福井県	記録なし
第20回	昭和57年11月20日	奈良市「菊水楼」	奈良県	記録なし
第21回	昭和58年10月15日	富山県「宇奈月グランドホテル」	富山県	記録なし
第22回	昭和59年11月10日	片山津温泉「矢田屋松濤園」	石川県(梅田)	記録なし
第23回	昭和60年11月23日	東京都「帝国ホテル」	関東(深谷・野田)	
第24回	昭和61年11月1日	芦原温泉「開花亭」	福井県(稲葉・村田)	記録なし
第25回	昭和62年10月30日	高岡市「ホテルニューオータニ高岡」	富山県(熊谷・齊藤)	記念写真なし
第26回	昭和63年10月29日	山代温泉「ホテル百万石」	石川県(半田)	
第27回	平成元年	芦原温泉	福井県(打波)	
第28回	平成2年9月23日	金沢市「つば甚」	石川県	30周年・記念誌「医王第2号」発行
第29回	平成3年9月22日	京都市「京都ホテル」	関西(中山)	記録なし
第30回	平成4年10月3日	富山県「千里山荘」	富山県(石政・長井)	記念写真なし
第31回	平成5年9月11日	勝山市「ホテル勝山」	福井県(稲葉)	
第32回	平成6年10月29日	浦安市「トーキョーVH」	関東(深谷)	
第33回	平成7年10月14日	金沢市「金城楼」	石川県(渡辺)	35周年記念
第34回	平成8年10月12日	富山市「名鉄富山ホテル」	富山県(齊藤・熊谷)	資料なし
第35回	平成9年10月11日	敦賀市「グリーンプラザホテル」	福井県(稲葉)	
第36回	平成10年11月22日	福岡市「シーホークホテル」	福岡県(三原)	
第37回	平成11年10月16日	名古屋市「名鉄グランドホテル」	名古屋(横田)	
第38回	平成12年10月18日	金沢市「つば甚」	金沢市(高松)	40周年記念
第39回	平成13年10月7日	富山市「第一ホテル富山」	富山市(望)	
第40回	平成14年10月12日	横浜市「ニューグランドホテル」	関東(天羽)	
第41回	平成15年10月12日	宝塚市「宝塚ホテル」	奈良県(坂上)	
第42回	平成16年9月19日	松山市「道後温泉」	四国(撰津・村田)	
第43回	平成17年9月24日	片山津温泉「ホテルアローレ」	石川県(佐藤・梅田)	45周年記念
第44回	平成18年7月16日	宇都宮市「ホテル東日本宇都宮」	北関東(東北(藤原))	
第45回	平成19年10月7日	新潟市「ホテル日航新潟」	富山・新潟(石政・本多)	
第46回	平成20年10月12日	富士市「ホテルグランド富士」	静岡県(中島)	
第47回	平成21年9月20日	上諏訪温泉「鷺の湯」	長野県(横山・後藤・天羽)	
第48回	平成22年9月18日	金沢市「金沢ニューグランドホテル」	金沢市(木南・佐藤)	50周年記念
第49回	平成23年10月22日	奈良市「ホテル日航奈良」	福井県・奈良県(伊与・坂上)	
第50回	平成24年10月27日	名古屋市「マリオットアソシアホテル」	名古屋(横田・河田・堀之谷・嶋崎・油井)	
第51回	平成25年10月13日	富山市「富山第一ホテル」	富山県(布谷・石政・齊藤・堂・渋谷・熊谷)	
第52回	平成26年10月12日	パレスホテル東京	首都圏(内山・風間・野田・畑尾)	
第53回	平成27年9月26日	金沢市「山の尾」	金沢市(佐藤・半田・筑田・横濱・山崎)	55周年記念

「六年間の意味を問う」

医学類五年 白尾 裕美子

皆様こんにちは。新緑の風薫る今日この頃、みなさまいかがお過ごしでしょうか。医学類五年生の白尾裕美子と申します。このたびは十全同窓会会報の執筆依頼を頂き、大変恐縮しております。拙い文章ではありますが、ご一読いただければ幸いです。

まずは簡単に自己紹介を。わたしは金沢に生まれ金沢に育ち、金沢大学附属高校を卒業後金沢大学医薬保健学域医学類に入学しました。地元出身学生としてはきわめて典型的な経歴です。大学ではKUREという医療系サークルや「think about yourself」という性に関する啓発団体に所属しています。

先日、在校生として金沢大学の卒業式を訪れ、お世話になった先輩や友人の卒業を祝福してまいりました。三月の青空のもと華やかな袴やスーツを身に纏い祝福を受ける姿を見ると、昨日まで仲良く話していた彼らがどこか手の届かないところへ行ってしまうような気がして胸がチクリと痛みました。サークルの友人や高校時代の同級生の多くは今年卒業を迎え、わたしたち医学生よりも一足先に社会人の仲間入りを果たします。いえ、むしろわたしたちが遅れをとっているのかもしれません。医学生が社会に出るまでに、これからさらに二年間の学生生活が残されています。今日はこの場をお借りして、この二年間の意味を考察してみようと思います。

一つ目は、専門的な知識を最大限高めること。二年後の国家試験で一定の点数を獲得しさえすれば、医師となり患者さんの命を預かることとなります。しかし、実臨床では国家試験に出題されない疾患の患者さんに出会うこともあるでしょう。典型的な症状や検査値には当てはまらない患者さんもおられるでしょう。この職業の特性を考えると、「もう勉強はし尽くした」と言える日は一生来ないのではないのでしょうか。しかしながら自らの過ごしてきた大学生活を振り返ってみますと、大量の講義やテストに追われ、目先の試験でとりあえず合格することだけを目指しその場しのぎの勉強をしてきたように感じます。五年生からはBSLも始まりますので、今一度医師になる者としての自覚を持ちさらに勉学に励行せねばならないと強く思います。

二つ目は、大学生の間にしかできないことをやってみることです。医師は激務と言われていますから、まとまった時間を自分のために使うことができないのは大學生が最後でしょう。僥倖ながらわたし自身の話をさせて頂きますと、前述のようにわたしはKUREという医療系サークルに所属し、E@E@E部門で活動しています。この部門では、毎年夏休みに学生のみで東南アジアに赴き、国際NGOやJICA、国連機関への訪問や、病院見学、ボランティア等を行っています。入学して間もないころ、みんなで海外に

行くなんてなんだか楽しそうだという理由だけで参加を決めました。はじまりはなんとも不純な動機ではありましたが、E@E@E Tripに行ったことで実に多くのことに気づくことができました。

ひとつ、治療で救える命は多くはないこと。発展途上国では、衛生状態や保健・医療体制の不備により命を落としている人が今も多くいます。そのようなときに大きな効果をもたらすのは一人一人を助ける治療ではなく、啓発活動や公衆衛生の向上によって病気を未然に防ぐことです。我が国でも検査の普及や啓発によって発生を抑えることができる疾患もまだまだ存在します。医療とは一人の患者さんを治すことだと思い込んでいたわたしにとって、公衆衛生という観点から医学に関携する選択肢もあると知ることができたのは大きな気づきでありました。

ふたつ、知ることが全ての始まりであること。一昨々年タイのUNICEFにて難民について勉強したときのことで。そのときは九〇年頃に発生したビルマ難民について学びましたが、我々がこうして平和に暮らしている今も新しい難民は発生しています。自分が難民について学ぶ前はそんな当たり前のことにすら気づきませんでした。どんなことも知ろうとしなければ何も得ることができません。そして知らなければどんな行動も起こすことができません。知ることに対して貪欲でありたいと強く思うようになりました。

みつ、どこでやるかではなく何をやるかが重要であること。これは、ミャンマーにてJICAの感染症部門に携わっておられた女性がおっしゃっていたことです。自分のやりたいことが決まったら

それをとことん突き詰めていけば良い、自分の意思と肩書きやネームバリューのどちらが大事ななんて決まっているでしょう。やりたいことが決まったら突っ走ってみなさい。足りないものが見つかったらあとから補えばいいのよ。そう言う彼女の姿は実に格好良く、この言葉はたちまちわたしの座右の銘となりました。

書き連ねればきりが無いほどたくさん学びがありました。東南アジアで得た全ての経験はわたしの財産となり血や肉となり、現在のわたしを構成しています。興味に突き動かされ、いろいろなところへ駆け回り、答えの出ない問いに対して夜な夜な考えをめぐらせるというのは確かに「大学生の間にしかできないこと」でした。そしてこれらの学びを踏まえて、なんらかの活動を行ったり将来を考たりできる時間が与えられているのが、医学生の大きな強みであると思います。これもまた「大学生の間にしかできないこと」でしょう。

六年という長い学生期間を与えられ、わたしたちはときに焦ったり手持ち無沙汰になったりします。しかし、この時間には必ず意味があると思います。否、自分の手によって切り開いていくことで意味のあるものになると思います。わたしは、残り二年間の大学生という人生のモラトリアムを、自己への投資期間として大切に大切に浪費してゆく所存です。



# 大学院先進大予防医学研究科 看板の除幕式

日本初の先進予防医学を学ぶ場として金沢大学が本年度新設した同大学院先進予防医学研究科の看板除幕式が四月十九日、金沢大学医学類F棟玄関前にて挙行された。除幕式には山崎光悦学長、山本博理事・副学長（国際・附属病院・同窓会担当）、柴田正良理事・副学長（教育担当）、金子周一医薬保健研究域長、中村裕之先進予防医学研究科長がロープを引き、新たな教育研究拠点のスタートを祝った。山崎学長は「千葉大学・金沢大学・長崎大学との共同大学院という画期的な新制度の元、将来の先進予防医学を担う人材を育成していきたい」と述べられた。続いて、中村研究科長が「予防医学の重要性は社会の要請であり、これに応えるために多くの臨床分野や基礎分野

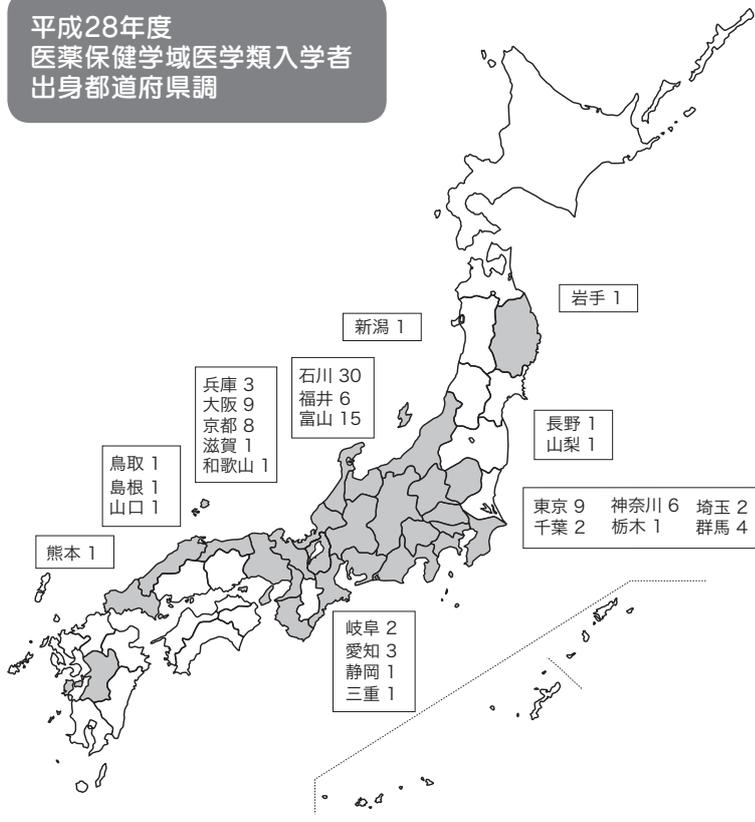


の知力を結集した学問体制を組織したのがこの新しい研究科であると説明し、同研究科が、遺伝子や環境などに応じ、個別に病気を防いだり、進行を防いだりする個別化予防を教育・研究し、世界水準の予防医学の研究の場を目指す」ことを抱負に掲げた。本年度は医学部出身者ら十四人が入学し、四年間の先進予防医学共同専攻課程において、金沢大学を中心

とした先進予防医学に関する科目を履修すると同時に、千葉大学と長崎大学での授業を遠隔授業システムBlended Boardなどの活用を通して受講し、それぞれの大学の単位を取得しつつ、博士論文を完成し、医学博士を目指す。なお千葉大学では十二人、長崎大学では十人の新入生も本大学院研究科においてオミクス解析や分子疫学を中心とした科目を修め、また副指導教員として千葉大学、長崎大学の学生とも関わることとなる。

(中村 裕之 記)

平成28年度  
医薬保健学域医学類入学者  
出身都道府県調



## 編集後記

本号は、新しい年度を迎えるにあたる節目にあたる号であるため、大学側として学類、大学院生の新入生に対する教育目標を掲げつつ、多くの期待とエールを送る内容も盛り込まれています。その中で、国立大学法人金沢大学が今後、どこに向かうかは同窓会の先生方にとって大きな注目の的であろうかと思えます。この三月に金沢大学は平成二十八・三十三年度にあたる第三期中期目標を提出しましたが、その中心的構想は、持続的な「競争力」を持ち、高い付加価値を生み出し、二十一世紀における世界の先端に位置する真の「グローバル大学」を目指すことかと思われれます。そのための中期計画の中心は、教育改革、研究力強化、国際化、診療と地域貢献、人事・ガバナンス改革などが挙げられております。そのキーワードは「改革」であることは疑いありません。今の金沢大学の「改革」路線に筋道をつけられました中村信一前学長は、「改革なくして大学の発展なし」を掲げられ、多くの教職員がその認識を共有して来ました。改革の一環として先進予防医学研究科も今春、立ち上がりました。しかし、さらにその改革の速度は増しております。特に国際基幹教育院と新学術創成研究機構の設置、IASTとの共同大学院「文理融合大学院研究科（仮称）」構想など、目まぐるしい大きな組織改革の嵐に加え、リサーチプロフェッサー制や卓越研究員制度などの新しい制度が導入されたため、これらの改革に柔軟な対応をしない限り、医学系が蚊帳の外に置かれる日も来るかもしれません。そのようなことが決ってあつてはならないと念じ、ますます十全同窓会の諸兄の先生にもご支援をお願いする次第でございます。(中村 裕之 記)